

# KYOTO DESIGN CONFERENCE 1987

みんなで語り合おう

## 第7回京都デザイン会議 会議録 建都1200年へ スーパー・デザイン'87



# 第七回 京都ナガイン会議・会議録

昭和六十二年三月二十九日(日) 日岡博物館 岡崎・京都市伝統産業会館三階



## 第七回「京都デザイン会議」委員会構成(順不同)

主催／京都デザイン関連団体協議会(京デ協)

カッコ内は略称

社団法人日本図案家協会(日図) 京都服飾デザイナー協会(KDK)

社団法人日本デザイン文化協会京都支部(NDK) 京都伝統産業青年会(伝青)

京都インテリア産業協会(KIS) 社団法人京都デザイン協会(KDA)

京都室内装備設計士協会(室内) 協同組合京都クラフトセンター(KCC)

京都建築設計監理協会(建築) 社団法人日本グラフィックデザイン協会京都地区(JAGDA)

社団法人京都国際工芸センター(ICC)

運営委員会

委員長 柴田 献(京デ協代表幹事・KDA理事長)

委員団 武夫(日図会長) 上田 年子(NDK理事長) 阿部コオイチ(NDK京都支部長)

川島 美憲(伝青会長) 川島 春雄(KIS会長) ICC理事長) 野口 茂(室内会長)

南澤 弘(KCC理事長) 畠中 繁(建築会長) 田積 司朗(JAGDA京都代表幹事)

実行委員会

委員長 今西 慧(KDA副理事長)

企画・運営委員

西村 好雄(日図) 熊谷 實(日図・NDK・パティ兼務) 小山 道子(KDK)

谷口 主嘉(伝青) 本郷大田子(KIS) 山本 龍一(KDA) 尼川 恵一(室内)

森 勝久(KCC) 道家駿太郎(建築) 橋本 繁美(JAGDA) 小川 幸雄(ICC)

広報・動員委員

佐々浪昌夫(日図) 山本 次枝(KDK) 村上欣美枝(NDK) 井上美恵子(NDK)

谷口 秀二(伝青) 岸本 康志(KIS・記録兼務) 尾崎 要(KDA・財務・パティ兼務)

大木ミヤ子(KDA) 藤川 一光(室内) 篠持 弘(KCC) 満野 久(建築)

大野 好之(JAGDA) 黒竹 節人(ICC)

後援／京都府・京都市・京都商工会議所・財平安建都一二〇〇年記念協会・大阪通産業局・財日本産業デザイン振興会

財國際デザイン交流協会・京都経済同友会・京都青年会議所・京都職業青年部・京都新聞社・朝日新聞社(支)

毎日新聞社(支)・大阪読売新聞社(支)・サンケイ新聞社(支)・日本経済新聞社(支)・日刊工業新聞社(支)

日本工業新聞社(支)・日本機械新聞社(支)・機研新聞社(支)・共同通信社(支)・時事通信社(支)・京都リビング新聞社

NHK京都放送局・KBS京都・毎日放送(支)・朝日放送(支)・関西テレビ放送(支)・読売テレビ放送(支)

テレビ大阪(支)・オール関西・関西デザインニュース社(順不同)

協賛／京都銀行・京都信用金庫・京都中央信用金庫・伏見信用金庫・西陣信用金庫・京都相互銀行・南京都信用金庫(順不同)

# スーパー・デザイン'87

建都一、二〇〇年へ

●第七回京都デザイン会議 会議録目次●

建都一、二〇〇年記念事業構想

木下 稔 4

反時計回りのすすめ

柴田 献一 8

全員参加 九分科会トークセッション

日岡・NDK

KDK

●第一分科会 〔国際情報基地・京都〕

伝青

●第二分科会 〔京の着だおれ〕

KIS・ICC

●第三分科会 〔ものづくりから、ものひろめへ〕

KDA

●第四分科会 〔工芸情報は国際メディア〕

室内・建築

●第五分科会 〔景観都市の色彩を考える〕

KCC

室内・建築

JAGDA

●第六分科会 〔京都発・1994年〕

●第七分科会 〔国際性とは何か〕

一般参加

●第八分科会 〔グラフィック・マルチパワー〕

一般参加

●第九分科会 〔二条城に天守閣をつくろう〕

参加者名簿

# 平安建都一、一一〇〇年記念事業構想

木下 稔  
(財)平安建都千二百年記念協会  
理事長

## 創造的再生を目指して



木下でございます。建都一二〇〇年もいよいよ七年後に迫り、京都デザイン会議始め、各界・団体でも、この記念すべき年に向けて、種々の議論や行動が起りつつあります。その中で、私共「記念協会」がこの建都一二〇〇年をどういう風にとらえ、活動して行こうとしているのか、そのあらましをお話し致したいと存じます。

さて、いつも言われることですが、京都が置かれている現状はどうかと考えますと、やはり、大変悪い状態であると言わざるを得ません。経済的に地盤沈下が著しく、このままでは、一地方都市へ転落ということも現実にあり得ます。また日本が全体として抱えている高齢化社会という問題、これについても京都は十大都市の中で一番深刻な状態にあります。それと同時に、人口、教育施設、工場などが、どんどん市外へ流出しています。特に同志社、成安、平安女学院など大学が市外へ出ると、文化都市、学術都市としての特徴が薄れることになります。このような情勢下で、京都は二十一世紀へ向けてどう再生し発展を図るのか、今それが求められているわけです。

それでは今から約百年前、建都一一〇〇年の時

はどんな事が行われたのか、ここでちょっと振り返ってみたいと思います。ざっと見渡しても、内国勧業博覧会（明治政府主催・第四回・明治二十八年四月一日～七月末、第三回までは東京上野公園で、第五回は大阪天王寺で開催）、平安神宮の創建（明治二十六年地鎮祭）、平安神宮の祭礼として始まった時代祭、琵琶湖疏水の建設（明治十八年、京都近代化政策の基幹事業として着工され、同二十三年第一期工事完成）、この疏水の水力発電を利用した京都電気鉄道（明治二十七年設立、同二十八年塩小路高倉（伏見下油掛町間に仮開業、博覧会期中は岡崎の会場前まで乗り入れた）等々、大規模イベントや土木建設事業が実施されました。これは現代の我々から見ましても大変な事業でして、当時これだけのことが出来たのには、首都を東京へ持つて行かれたことによる京都市民全体の危機感が、ひとつの方向に力を結集しやすい雰囲気を作っていたことが挙げられます。これに加えて当時の京都には、東京・大阪と並ぶ三大都市としての自負と力がありました。日本全体としても、歐米の技術に追いつこうという大きな目標を持っていましたから、当時の京都が次々と大事業を遂行していく心理的・経済的下地が十分にありましたと言えるわけです。

それから一世紀という時間が流れ、京都のお



かれている状況が一変したことは冒頭にお話しましたとおりです。いま京都が直面している問題は多かれ少なかれ、この二十世紀末に各都市が共通に抱えているものもありますが、かつて建築家の安藤忠雄氏が——自分も二十世紀末を生きる者として、新しい世紀を迎えるためにそれなりの役割を果たしたいと思っているが、それでも時代の放つエネルギーというものを考えると、二十世纪末は十九世紀末のあのダイナミックな動きに較べれば随分見劣りがする、もしできるなら自分もあの時代に生きて、縦横無尽に活躍したかった——と語っていましたが、まさに建都一二〇〇年を迎えてようとしている京都人の気持に通じるところがあるように思います。

そこで、私共平安建都一二〇〇年記念協会が、いまの情勢下において、記念事業を考えていくにあたりましては、たんなるお祭に流れるのではなく、創造的再生と申しますか、活力ある京都の二十一世紀へ向けての出発点となる事業としなくてはなりません。

そのための基本理念と致しまして、

『常に新しく、活力に満ち、内外に開かれた情報社会にふさわしい、文化的創造的な都市を築きあげるための事業』

ということを掲げております。この理念に基き結集した、京都府・京都市・商工会議所・文化人・労働団体の力を総合してこの記念諸事業を成功させたいと考えております。

その中で具体的に出て来たものとして、第一に向島に「洛南サイエンスタウン」を建設する計画



が進んでいます。今まで市が進めてきた都市基盤整備事業としまして、清水焼団地、東土川の工業団地、洛西ニュータウン等がありましたが、それ以降の取り組みがされず、整備事業が遅れ過ぎたという現実があります。そこでこの洛南サイエンスタウン計画は記念事業の中心として、京都市内に新しいマチを創るという意欲的な姿勢を持つものであります。この建設計画に平行して、既に動いております京阪奈丘陵の開発、大阪・奈良を含めての文化学術研究都市の建設を推進してまいります。この学研都市は果たして京都市にとって有用なものなのか疑問視する方もあります。しかし、そこでの基礎的研究の成果が企業誘致に結びつくことになり、近隣都市とのネットワークを持ちながらの総合的発展を目指すことは、古都京都の将来にとりましてとても大切なことであると考えております。その中で、洛南サイエンスタウンは位置的に京都市と学研都市を結ぶ中間点にあり、ネットワーク化を推進する上での要となるものであります。



次に、市中心部の開発のたち遅れが言われておりますが、市民アンケートにも表れました京都のシンボル的地域である岡崎、この地域の整備事業も記念事業のひとつになっています。さらに今度民営化されました国鉄の京都駅も、京都市の整備事業として鉄道との協力を考えております。これは駅舎及び駅ビルを改築致しまして、新しい企業誘致を実現したいと考えております。これに関連して、現在、アバンティだけが出来ておりますが、京都駅周辺の再開発、国鉄（JR）山陰線の高架化に伴う二条駅周辺の整備、地下鉄乗り入れに応じた山科駅周辺の整備等も計画されています。

これら都市再開発、整備事業を推進するうえで不可欠のものとしまして幹線道路網及び高速鉄道（地下鉄）の整備事業があります。京都と隣接都市を結ぶ幹線道路の整備は、他都市のエネルギーを京都に導くための重要な手段であり、深刻な交通渋滞を解決するために必要なものです。市内高速地下鉄網もまた、交通渋滞を緩和し、都市景観を

保全し、京都市域及び周辺地域の価値を高めるための強力な方策であると考えております。京都の地下鉄は着工が遅かったため建設経費が大変高くつきましたが、来年春には南北線の南側部分が、三年後には北部が完成予定です。また東西線は、山科から二条駅までは建都一二〇〇年までに完成させる予定であり、最終的には洛西二ユータウンまで乗り入れます。これらの道路整備は新しい暮らしと産業に寄与するものとして欠くことの出来ない事業と考えております。

## 複合的文化都市へ

次に京都は文化と歴史の都であり、複合的文化都市としての機能を充足することが要請されます。その一環と致しまして、シンフォニーホールが近く着工の運びとなります。また国際交流センターの建設計画が検討されています。来年十月には府立文化博物館が開館予定であり、洛西桂坂には、国立の日本文化研究センターが建設予定でして、この四月にその設立準備室が出来ております。このようにコンベンションセンターとしての京都の再生を目指して、記念協会内でも博覧会等一二〇〇年目に行う事業を担当する所、またそれまでに各イベント企画を担当する所と、各部会に分かれて検討が進んでおります。

ところで、今までお話ししてまいりましたことに対して、より精神的な面と申しますか、施設や道路整備に限らず、歴史の都としての京都を復興するための計画もございます。そこにはまた、封





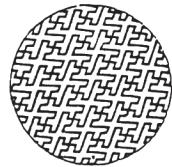
二十数万の人々にお集まり頂きました。これも京都の第一線のクリエーターの方々にお力添えを頂き、建都一二〇〇年記念のイベントとして成功であったと考えております。

これを出発点に、一二〇〇年に向けて次々に各種のクリエイティブな活動・行動が始まっているわけでございますが、最後に、今日お集まりの皆様方、京都で御活躍の各界デザイナーの方々への期待をお話ししたいと思います。

建支配の中で差別されてきた人々の問題を考え、解決してゆくため、人間の問題、存在の問題を考える部会もございます。また、一二〇〇年を迎えるにあたって、モニュメントを作ることが考えられております。一時は三条四条間の鴨川に橋を懸ける案が出ましたが、事業として少し規模が小さいので、替わりまして、平安の都を象徴する朱雀門や羅城門の復元等が案として出ております。この遂行のためには、福知山城が三、四万人の全福知山市民の寄付により再建されたように、一五〇万京都市民の浄財に期待しております。

また記念博覧会でございますが、これは從来開催されてきたような産業博覧会ではなく、都市文明そのものを考え方のものでございます。京都において都市文明とは何かと考えますと、やはり学術、そして技術、芸術という三本の柱、これら都市の文明を形成する要素と市民の暮らしとの関わりを考えるものとなります。その手始めとして、昨年秋、四条の人間広場を再現致しまして

易黒字九〇〇億ドルという状況の中で、国際摩擦が激しくなっております。この危機的状況を解決するために目指すべき日本の方向は、從来の工業化社会から脱皮した新しい産業社会だと考えております。これは別の角度から見ますと、消費者側の需要が多様化しているにもかかわらず、供給する側がまだ十分それに対応出来ていないということです。それこそ、京都の中心的産業である各伝統産業が抱えている問題です。すなわち高度な技術や品質を維持しているにもかかわらず、デザインや機能の面で現代人の要求に十分対応しきれていないということ、そのギャップにこそ、皆様、各界デザイナーの方々に御活躍頂く場がございます。皆様方の新しい発想と感性によって、この沈潜した状況に活力を入れ、新しい需要の展開を目指す、それこそ、現代の京都が、そして日本が求めている活路であり、デザイン界に求められるものであると思います。本日のデザイン会議がこの可能性を一步進めるものとなりますよう期待しております。ありがとうございました。



# 反時計回りのすすめ

柴田 献一

主催者代表

## 京デ協誕生

皆さんこんにちは。いよいよこのデザイン会議も七回目を迎えて、「七五三」で言えばお姉ちゃんのお祝いの時期になりました。

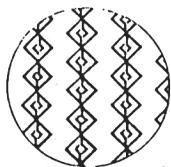
今年第七回京都デザイン会議開催にあたり、本

年はあらたに三団体（京都室内装備設計士協会・京都建築設計監理協会・社日本グラフィックデザイン協会京都地区＝JAGDA）の加入があり、これまでの八団体による京都デザイン協議会から、計十一団体による京都デザイン関連団体協議会（京デ協）が新発足し、その主催によるデザイン会議であるという大きな変化をまず申し上げたいと 思います。そこでこの「京デ協」発足に到るまでの経緯と申しますか、なぜこうなったかというこ とをちょっと御説明申し上げます。

これはつまり、ニワトリが先かタマゴが先かと いう話になってくるんですが、今から八年前、WCC（世界クラフト会議）が開催され、当初は世 界・所会議？などと悪口を言わながらも、皇 太子殿下をお迎えし、世界からも人を招いて、京 都を挙げてのインターナショナルイベントを展開

したわけです。WCCの開催は、それこそ日本の美術工芸史始まって以来の大イベントで、京都の政・財界、生産者、芸術家、つまり京都を丸ごと巻き込んでの大事件となつたのです。

開催にこぎつけるまでは大変だったわけですが、こんな大事業も目前で出来るんだという、京都全體の認識が生まれたことは、京都にとりまして大きな自信になつたわけでございます。これをきっかけとして、「京デ協」の一員である京都国際工芸センターも発足しましたし、何よりも それまで交流のなかつたいろいろな職業の方々が参加して共通体験を持てたことは、大変貴重な経験となつたのです。この「インターナショナルイベントを自前で出来る」という自信と、高揚した気分がまだ熱い時に、七つの団体が協力して、第一回京都デザイン会議が始まりました。当時の写真を見ておりますと、私も含めて髪がまだフサフサ黒 黒した懐かしい姿が写っております、七年の経過が感じられます。こうしてデザイン関連団体が共同して何かをやろうという動きも、WCCの遺



産として今日に続いているわけでございます。

私、毎年このデザイン会議が始まる前に、一号

からの会議録を通読致しております、この会議

がどういう流れに乗って続いて来たのかを見るこ

とにしております。そうするとこの七年の間にず

いぶん変わって来ておりまして、開催スタイルも、

ある時は車座になってホカホカ弁当を食べながら

という家庭的な会もあれば、国際会議場を借りて

の本格スタイルもありで、当然討議内容にも、大き

な流れの中での変化が見られます。その中で、一

昨年開催されました国際伝統工芸博も話題となり

ましたが、これは基本的に大阪のプランナーが動

いての、外からの持ち込み企画だったわけです。

その時、なぜ我々が自前でやれなかつたのか、な

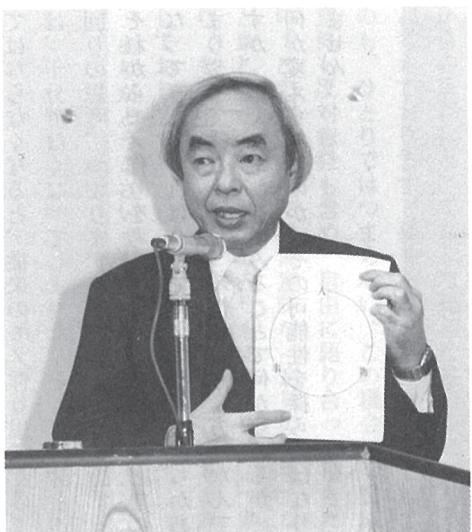
んのためにこのデザイン会議を続けて來たのか、大

きな反省がありました。何とか、京都地元のデザ

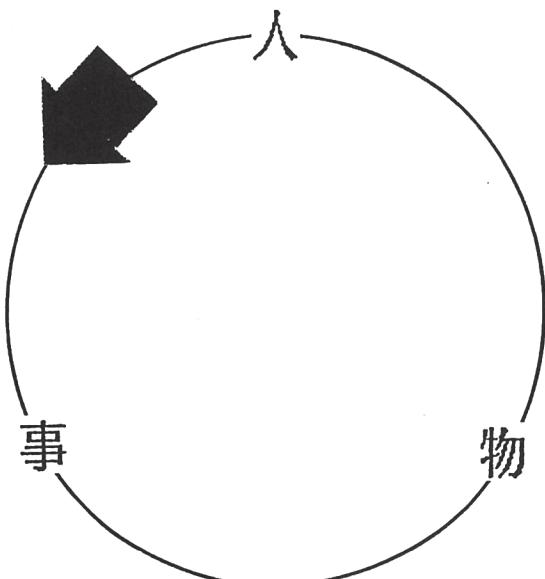
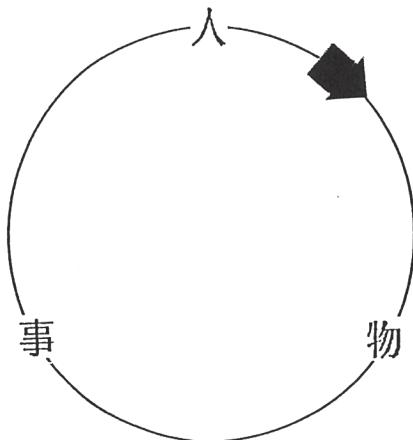
イン関連団体が、名目じゃなく、一つに結束し

ました。そこに丁度、平安建都二二〇〇年記念協会が出来、よし、ひとつこの事業を目標にして、自前で、この記念すべき建都二二〇〇年のイベントをやり遂げようじゃないかという気運が盛り上がりまして、昨年五月一日に九団体が結束しての、「京都デザイン関連団体協議会」発足となつたわけでございます。この発足を機に、「建都二二〇〇年記念協会」と「京デ協」は一身同体となると申しますか、さしづめ、本日のデザイン会議は、両者の婚約発表式と申し上げて良いかと存じます。

さて、本日これから、各部会に分かれてのセッションがあるんですが、私共デザインを業とする者の未来運動について少し申し上げたいと思います。これまで、デザイナーの仕事と申しますのは、いわゆるモノ作りでございました。従いまして、デザイナーの間で出て来る議論と言いますのは、デザイン論であり、装飾論であったわけです。人として、いかに美しい物を作るか、人は物を美しく



M E D I A



### コト作りへシフトする

これからの大イベントであります建都一二〇〇年記念事業も、まさにこのコト作りでございます。ところが、潮流が変わったと申しますか、大事業を控えて、必然的に大勢の人々が意見を述べなく

装えるか。人がモノを作り、それが集積して社会が全体として美しくなる。この論理の流れの中では、モノ論が出来ないと、一人前のデザイナー・クリエーター、また職人になれなかつたわけです。そこにある思考パターンは、"時計回り"のと言いますか、正攻法だったわけです。こういうモノ作りの人々と、コト作り、つまり企画プランニング等の人々とは、仲々意見がかみ合わなかったのです。ところが、潮流が変わったと申しますか、大事業を控えて、必然的に大勢の人々が意見を述べなく

てはならなくなると、従来のモノ作り思考だけでは、十分でなくなってしまった。そこで時計と逆回りの思考、つまりまずコトを起こす事を論ずる、それからモノ作りを考えて行くという形が必要になってきた。これは今までモノ作りの人たちがあまりやって来なかつた、不慣れな思考方法なんですが、敢えてそれを試みることで何が変わるか、何が変えられるのか、その可能性を探らねばなりません。

はないか。真近に迫りつつある大イベントを、このコト作りの発想でアプローチすることで、真にクリエイティブなものにして行きたい。この好機に、何が変わるか、何が変えられるかに、我々の

この集いに対する評価というものが生まれて来ます。今日の私のオリエンテーションの中心と致しまして、この“反時計回り”の思考というものを強調したい、どうかこの発想で今日の会議の中身を作り上げて頂きたい、と考えております。

それにつきまして、前六回分の会議録を検討してみると、面白いことにそのテーマがやはり「モノ」から「コト」の流れに変わってきていることがわかります。もう六年前になりますが、第一回目の会議録の目次をみると、やはりモノ作り一造形論が主となっていました、「デザインと文化開発」「京都スタイル誕生」「ファッショングッズ」「美の集約」「比較装飾論」等はっきりモノ作りを意識したものとなっていました。これが第五回会議録となりますと、「京都・二足のワラジ」「京都のイメージチェンジ」「関西コリドールプラン」等々、明らかにコト作りを目指す論が展開されております。そして昨年第六号では、「つかしん・マチの創造」とい、「京都・美都市計画」とい、もうハッキリとコト作りが意識されたものでした。この「つかしん」のコンセプトをみると、従来のように、モノを売ることを優先していない。むしろそこにヒトが集まって来て、遊んで貰いたい。

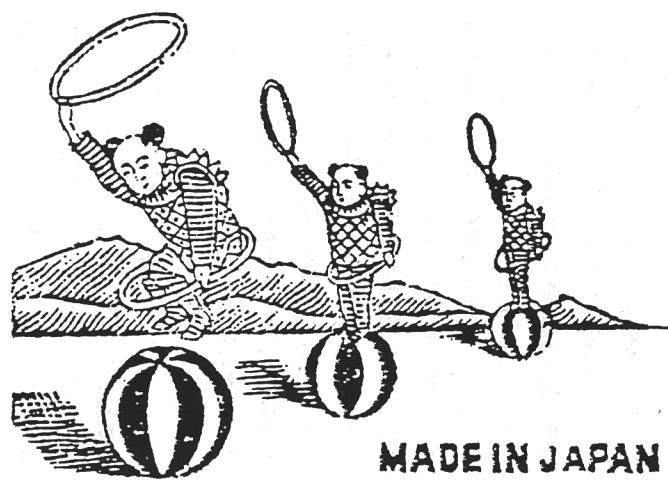
そういう空間・マチを造りあげて、そこで高品質なユーモアを育て、そこに上質なモノを供給する。目先の利益じゃなく、こういう遠大な視野があつたわけです。

今日お集まりの方々は、当然モノ作りに関わる人が多いですが、ひとつ、反時計回りの発想で、この会議を盛り上げて頂きたいと思います。

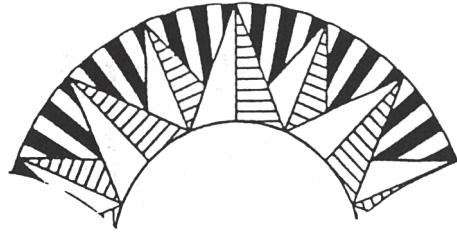
最後に、このデザイン会議というもの、これだけ広くいろんなジャンルの人々が一堂に集まる機会というのは、本当に少ないわけです。近畿各府県を通じてみても、ほとんど見あたりません。しかも集まって来る人たちは、経営者であつたり、生産者であつたり、また職人さんであつたり、つまり“市民”が参加している会議であるというのはとても素晴らしいことじゃないでしょうか。このデザイン会議という名の花見を楽しみ、デザインという花を愛でる知的な京都人たちが、こういう機会を通してネットワークされることが、これから京都にとって非常な価値を生むことになると考えております。夢を語るのも、グチをこぼすのも、ひとりではつまらない。この機会に、賛成意見も反対意見も含め、自由に語り合って頂きたい。この会議の中では無意味な「意見の調整」など致しません。ぶつかり合うものは大いにぶつかり、その中から大きな共感が生まれることを期待しております。

ありがとうございました。





MADE IN JAPAN



全員参加

# 九分科会トークセッション



## パリ・コレ異変

1

中沢

中沢と申します。私は自宅で洋裁教室をやりますので、どうしても

お嫁入り支度の方とか、また将来仕事にしたいとかいうことで、真剣に取り組んでおられる方がありますので、そうした方々に接しておりますと責任を感じることありますので、自分を磨かなければとか、より魅力的になりたいということで、そのチャンスがあればできるだけ参加したいといふような立場で今日参加しております。

高瀬 NDKに所属させていただいております高瀬です。私も仕事としては専門学院で服飾のはう

の教える立場で、それから自宅で洋裁教室をしております。NDKに入っているんな分野のデザインをしている方たちと一緒させていただき、いろいろ自分自身に大いに刺激を受けたい、そういう気持ちでNDKに五年前から入らせていただいております。

高瀬 京都の国際性という問題ですけれど、考

えてみると、私、愛媛の出身ですが、やっぱり京都

人としてのなんかそういう「性格」みたいなものに、もうちょっとズッコケた部分があつて、そういう

ものがおおっぴらにパッと出せれば、京都以外のところへもっと発展させていく部分があるんじ

やないか。なんか京都人っていうのは、ツンとすま

したていうんですか。それと外には自己主張てい

うんですけど、あまりされずに内面に非常に自信を

もつてて、そして人がいろんなことを聞いた場合

に、なんか素直にパッと出さずには、いや、わからへんねん、とか、かなりそういう部分が邪魔をしてるんじゃないかなて、そういうことはちょっと

と感じますけれども。

熊谷 東京と京都はね、逆にチャンポンになつて

るっていうんですか、京都はやっぱりなんか一つのものづくりとしてのね、なんかよさっていうのは

やっぱり、京都イコール日本という感覚をものす

# 国際情報基地 日図・NDK 京都

ケンゾーはフランス人

イッセイは日本人

イッセイの神話

一枚の布

キモノ ケサ

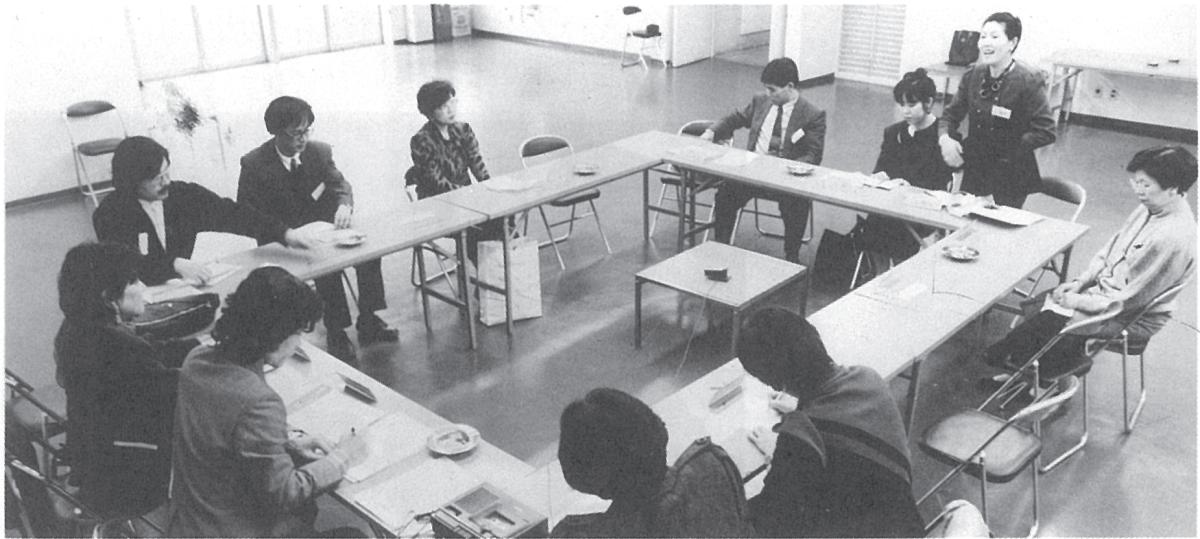
日本＝京都

熊谷 そろそろ本題に入つていただきたいと思います。  
そしたら村上先生、ちょっと。

村上 昨日の晩にヨーロッパから帰つてしましました。ちょっと自己紹介させてもらいますと、ウェディングドレスのデザイナーでシャルム商会というのをやっておりますけれども、何年か前、もう随分前になるんですけど、パリコレクションを見せられまして、それで一応特派員という形で一つの媒体の取材をかねて、また自分の買いつけや、それからライセンスの仕事、そういうものも

兼ねましてちょこちょことヨーロッパへ出向いております。今もぼちぼち老骨に鞭打ちながらとうようなどころでございますけれども。

仲 洋服関係にいるんですけども、実は今日着物を着てこうと思ったんですけど、どうしてもなんか着慣れてないいうか、面倒くさいという気持ちがありますのでね。それで今なんかせっかく京都におりながら、着物と、この間も着物で洋服をつくったショーランクも一点ですけど出させていただいたんですけども、着物で洋服をつくるか、着物自体の原型をくずして洋服にするか、というのを自分で今すごく悩んでいるんです。



ごく持ってると思うんですよ。そやから、今まで日本人の感覚でいうと、やはり東京は消費の街やから、なんかそっちへ持つていて、もっと国際的な視野にたつと、当然もう京都が本社っていうんですかね、そういう根拠地にならんとおかしいと思うんですがね。

村上 宝の持ち腐れね、京都人はね。

それと同じでね、ケンゾーさんがいつも友禅見にきて、それで未だに友禅のものを使つたりとか、ね。で、考えられないような色をうまいこと合わす。あの人はフランスでは日本人じゃないんです。フランスのファッショント界で、日本のデザイナーで、こっちで活躍して出てくる人で誰が一番よろしいですか?と言ふと、イッセイ、こう言うわけ。

ケンゾーは? ああ、あれはフランス人だよと言ふんです。

浅井 私はね、大阪なんです。大阪から京都へきて三十年になりますけれども、だから、割と、そのさつきおっしゃった余所から京都を見るということですとときまして、で、このファッショントの仕事をするようになって、京都はやっぱり伝統的に着物をやってられますんで、ファッショント、着るものに関して目ができますのでね。

向こうの人はお話して、例えばどつかへ一緒にいっても、ずっと歴史的にその話をしてくれるんです。別にそれは専門でなくとも。ところが日本人は、私だけかもしませんけれども、向こうからたとえなんかちょっと聞かれても、歴史的な背景から説明ができない。恥ずかしい話ですけど。

佐々浪 これは三、四年前ぐらいですけど、お隣

の韓国であるとか、中国が非常に専門的な知識といふか、基本的な知識を勉強して、こちらへ、いろんな専門の分野に派遣、民間の派遣をしてますよね。こちらもやはり最低の知識は勉強しておかんといけないということですね。

熊谷 フランスね、あちらで相撲を紹介したりとかね、柔道を紹介したりとか、やつてるでしょう。それでもなんか紹介の仕方がものすごく滑稽でいふんか、そのボスター。

村上 でも、すごく人気あつたんですね。

熊谷 そやから、知ってる人はものすごく細部まで知ってるけども、知らない人はなんか全然知らんという、ものすごうそれがね、差があるんですね。

佐々浪 いや、去年ね、この博物館で世界の教科書展をやつたんですね。そうすると、各国の教科書の紹介がされてるんですけど、非常に日本に関しての紹介の仕方が、終戦、戦後ちゅうような感じになってるんです。畳の部屋にちょっとまげで座蒲団に座りながら、隣にオートバイが飾つてあるとかね。

村上 フランスではね、割と日本人はえらいと思うてます。十五年前に行つた時はね、私らが何人かで通つてるとね、下町なんか行くと、「ジャッブ!」っていうのが聞こえました。それですごく不愉快な思いしましたけどね。今はすごいね、特にファッショント界ではね、八十人ぐらいのコレクションの中で日本人がその中で十人もコレクションする。そして、フランスの人でさえ、コレクションできなくてやめていく人もあるのに、日本

からあれだけの荷物をね、送って、そしてマヌカ

ンを雇つて、演出をしてやつてることに対し  
ては、もうなんかやつぱりすごい尊敬の目がある

みたいですね。



団 まー、熊谷君あたりから話が出てたかもわからんけどね。我々の関連してある作品を持つていつた場合にもね、私ども協会のこういうシステムは海外では非常に高く評価されている。というのは、ライバルをものすごく大事に育ててると。また協会で育成しているというようなことは外国では考えられんということがあるんですね。

村上 まあそれにしても、例え誰が見てもそうかわからないですけども、結局いわゆる評判の悪いのは、誰かのコピー。そういうふうなのはもう皆バカにして、それこそ気の毒だけれども、ジャーナリストも足音バタバタさせて、コレクションの会場から出していくわけなんです。そこへいくと、コムデなんかは自分のスタイルつくりましたでしょ。だから、すごい、そういう面の人気がある。それで、イッセイさんも、生地を巻きつけた、素材的にも納得できる日本の味を出していて、それで毎回見せ方もうまくやつてる。そういう面でいいわけです。

団 今度十一月に世界織物会議がありますね。あれなんかがええきつかけになると思うんですけど。それと、どつか信楽かどつかで、陶芸のあれ、世界のん言うてましたね。あれもできてきてるからね。京都へそういう世界的なイベント、特にデザインをもつてくるような企画を考えていきたいないうことはありますね。京都と琵琶湖を含めて。

## 和の素材、洋の用

河原畠

ブライダルのコスチュームのほうをやつておりますんですけど、先程からのお話にもありましたように、京都と婚礼衣裳っていうのは、ものすごくつながりというものがある。そのデザインに関して、京都よりは東京のほうが以前は秀れ

ていたというようなことが少し記憶に残ってたんです、いつのまにやら、京都のほうが、東京よりも優れてきたと思っております。

吉村 和の素材を洋に使えという、なんか私の一つの感覚みたいなのをもっておるんですけどね。

そういう意味で、京都ていうのは、クラフト集団だと思うんです。皆さん洋服つくつてられても、工芸品つくってても、お茶碗つくってても、全部クラフト集団だと思うんですね。誰か、先程伝青の方が言ってられたと思うんですけど。つくり手は、あるいは図案屋さんにしたって、絵を描く、着物の絵を描く、全部やっぱり京都が主導権をにぎってると思う、そういう意味では。つくるものに対しては。だから、日本の中でみた場合に京都のそういう工芸品とか、そういうものの諸々ですね。ウェディングは僕ちょっとわからなかつたんだけど、今着物ということが出れば、着物に関しては日本中から皆その図案を買い求めるに来るし、あるいはインテリアとして使いたい素材があれば、それが、京都が主導権をにぎっていると思うんです。ただ情報っていうもんに関して、情報源が全部首都、いわゆる中央に集まってしまっている。

村上 私も西陣ね、一回西陣でのブライダルショ

一 ていうのをさせていただきました、西陣会館で。けど、結局、あとそれをどうつなげていくか。西陣の生地でやらせてもらって、私個人のプライベートショーにさせてもらったんですけど、どうつなげていくかいうたらね、幅と値段の問題です。

吉村 割と高いんです。

吉村 そうです。確かにね、おっしゃる通り、着物に関するても一尺はいわゆる四十cmほどの幅。帯地にかんしてはもうちょっと狭くなる。そういう問題。なぜそういうことで広いものを織つていいかないか。織れるんですね。織れるけれども、あくまで未知数なんですよ。

河原畠 実際、西陣では安くしたら売れない、高くなったら売れるというね、そういう点が織物やなんかに、着物とかにまだ残ってるようと思つわけですね。これは、とりあえず高級品である西陣の品物であるから、今の織物にしても、これ安くしたら売れない。高くするから売れるとかいうのね。今のタキシードとか、ドレスとかいうことになりますと、どうしても商売の話になつて申し訳ないと思いますが、西陣で織つておられるもの、もう少し糸が細くならないのか、もう少し薄いものがいいと思うんですね、私。女性の方が召しておられるそのドレス、洋装式のものは必ず身体について、薄く見えるものがやっぱり男性から見て魅力であつて、それが洋装やと思うんですね。ところがまた日本の古典的な西陣の織物からいえば、少しでも肌を見せないように厚くしていたのが着物ですかね。

井上 着物でいうたら平面でしょう、洋服いうた

ら立体ですよね。洋服の観念からいきましたら、やっぱり立体的に身体を見せるということで、ニユーフィルムがなぜ売れるかと言うたら、パット入りたり、それからこれをずっと下げて、やっぱり立体制的に見せるという魅力だと思うんですけどね。

河原畠 それなんですね。

井上 やっぱり西洋と東洋の本質的な違いが立体、平面なんですね。

熊谷 我々デザイナーとして、例えば壁紙なら壁紙のデザインとして海外へ提案しますけども、相手が選んでくれるのは、全然壁紙以外の椅子張りとか、またカーテンとか、もちろん服もそうですし、いろいろあわよくばそれ以外のね、素材的に全然違うグラフィック的な要素にもとらえます。いま衣料としての素材であつても、なんかすごく常識で考へている以上のことを、相手は逆に見てるよう思つんですね。ですから、話をもう少し戻してみると、我々京都人やから、これがすばらしいやろうとして持つていったもんでも、決してあつちは魅力感じないということを、我々やつてきて思つたわけですね。

奥田 私、グラフィックデザイナー協会の理事やつてます奥田と申します。八分科会におりましたんですけどね。そこでもちよつと話が出ましたんですけどね。そこで職能のジャンルがあつても、グラフィックやからグラフィックだけにこだわる必要はないと思うんですね。こういう雰囲気になれるのは京都だけやと思うんですね。これ、私事で申し訳ないんですけど、実はこの間、二月末から三月まで一週間ですけども、ちょっと変わった



展覧会をやつてまいりました。東京ですけど、銀座で紙飛行機の展覧会やってきました。紙飛行機というのは、割に大人の世界で愛好家がおって、絶えず研究してやつとるわけです。それにたまたま私、子供の時分から紙飛行機が好きなんで、まあグラフィックでもパッケージをやってますんで、もう、思いもかけんような形の発想の飛行機をつくったわけですね。ところが、たまたまそういう変わったもんやつたからですね、マスクミが取り上げてくれまして、割に人を動員できましたのでね、そんなん見て紙飛行機の大家がとんできましたね。で、もう感動した言うてね、びっくりしたりわけですね。というのは、そういうデザイン的な発想でもって紙飛行機をつくったものがなかつたわけですからね。そういうなんで、今までデザイナーが入り込んでないところへ入ったもんやから、割にマスクミが騒いで取り上げてくれましたね。

そういった意味で、ファッション関係は私門外漢で、これがあたるかどうかわかりませんけども、やはりなんていうんですか、発想の転換をね、いわゆる水平思考するようにして、全然思いもかけない発想でもってやられると、また案外ね、道が拓けるんやないかと思うんですけどね。

井上 私ところの学校も、私事で恐縮ですけど、服飾なんですけどね。この方面、やっぱり服飾、女性の先生ばかりいるよりか、やっぱり男性の違う枠から入ってもらつたほうがいい、なんか創造的なものが入るんじゃないかということでね、去年、美術、芸大卒業の男の先生お二人にお入りいたいたいんです。何教えるかということが問題

なんですけど、なんかものづくりをする共通点がやっぱりあるわけなんですよ。ですから、そのへんのところ、造形演習っていう、そういうた項目を設けまして一年間やつたけど、なんかやっぱり面白いことやられるから、割と人気があるんですね。最終的にものをつくるという、そういうた動き、そのへんが共通してる、そこがやっぱり見出せるということが結論としてわかつてきただけなんです。

### コンポジション・京の技

井上 何か洋服いうたら生地ですから、生地以外のもので、着られるものをつくれていうようなね、そういう条件でものづくりさしたら、割と面白いんですね。意外なものが出来ますからね。

団 着物というのは、これでニュー着物ちゅうのが話題になってきてますわね。それは恐らく着物の中で新しいスタイルが今後もずっと流行、今の流行だけと違つてね、残るもんやと思うんですね。価格的にもうんと安いですわ。まず安くできると思うんですね。あれはものの、いいもので買ったはるんと違うと思うわ。ブティックでも、ね、洋装感覚でドレス買うのと同じ感覚で買うてるでしょう。

今度のニュー着物てのが出てくるとね、それで売れるとなるとね、従来の着物の発想だけではあかんようになつてくるわけです。

村上 そういう変化の中で京都のすばらしい地盤を生かして、たくさんの世界の人たちを引っ張つてこれるようになるとよろしいんですけど。



団 今年はそういうことに関してはイベントをね、府も市も抱えたはるし、十一月に集中してますからね。私とこの協会も昨日の夜に理事会でそういうのに協賛をするという意味で、この会館で我々ももてる新しい試みをやってみようという話はしてます。

村上 なんかフランスのシラクさんも出席するという、返事が来るとか聞いてますけど。

#### 団 歴史都市会議?

高瀬 今まで皆さんのお話を聞きまして、京都がいかにすばらしい人材が、そういう技術をもった人たちが多いかということはよくわかつたんですけど、それがどうして日本の国内において、世界に通用しないかていうことは、やっぱり人だと思ふんですね。だから、もうちょっと人をやっぱり、個人をもうちょっと周りがバツクアップして、ま

あ言つたら有名にさすかでいう、そういう部分が、京都は特になんじやないでしようか。

吉村 今おっしゃったこと、僕も痛切に感じてる

んですけど、例えば村上さん、先生方なんか東京へ出向かれること多いと思います。世界は別とし

ても。日本の中で、やっぱり日本人の中で東京は東京の感覚をもつた、いわゆる気質、いわゆる江戸っ子氣質っていうのがあると思うんです。京都は

京都の氣質が、大阪は浪花氣質っていうのが、皆も

っていると思うんですね。僕は仕事上よく東京は

毎月のように行くんですけども、根本的に違うのは、東京の人ていうのは、何かものを見る。例え

ばブティックでもなんでもいい。これいいじやない、これちようだい、が東京の人なんですね。で、

流行つていうのはそういうとこから生まれてくるわね。ところが京都は違うのね。ものすごい警戒心があるんですね……。

熊谷 結論というよりもむしろ色んな意見を出していただいたことが今後の京都、建都千二百年に向けての歴史を創っていく一環となると思います。ですから建都千二百年にはそのへんも我々として何かやっぱり考えていきたいとは思っておりますけども、これも先程のお話のように、人を、なんかやっぱり前に出していかないとね、いけないと思ふんです。ありがとうございました。

#### ●出席者（発言順）

中沢美代子（一般）

高瀬肥子（N D K）

熊谷 實（日 国）

村上欣美枝（N D K）

仲 純代（N D K）

浅井 幸（N D K）

佐々浪昌夫（日 国）

団 武夫（日 国）

河原畠久男（一般）

吉村文男（一般）

井上美恵子（N D K）

奥田広幸（JAGDA）

水口あき恵（N D K）

KDK

# 京の着だおれ

京の「着だて」 伊達

大正ロマンティシズム  
元禄デカダン  
着物を脱ぐ  
キモノになる  
偽物徘徊  
所詮、おしゃれは洒落

## 着物は着る物

西田 この頃のお客さんは皆さん合理的にならって、着だおれというような雰囲気の着物をつくつていただけるお客様が少ないと聞いています。

中橋

着物というのは、今の時代に機能的ではないですね。まずはそこから議論すべきじゃないか

と思います。それに、後始末が大変なんです。衿から長襦袢やらいろいろ、そういうものが。また一般的の値段にあわないものもあって、また若い人はだんだん遠ざかっていく。

上田 これ着だおれというのは、ちゃんととした言葉ではなくて、先程出ました京の着だおれ、大阪

の食いだおれ、東京の履きだおれというふうに、何に生活の基準をおくかということですね。

河合 私ね、「京の着だおれ」っていう議題にした

よって、お電話いただいた時ね、京の着だおれっておしゃれというような意味におとりになってるんですけどね、倒れるということは倒産することよって。これは反語なんですね。だから私は、「着だて」じゃないの? 着だおれ言うたらダメで、「着道楽」ていう言葉があるでしょう、このことなんですね。

いま、ニューキモノというものが出てまいりましたでしょ。私、昨日まで東京におりましたんですが、丸井の着物の店、あれがすごいんです。一体どういう人がね、セットになつた合織の着物を買つてゐるのか見ていると、若いんですね。だから、今まで二十歳代のお客様つていうのは、着

物の売場に寄りつかなかつたんですけどね、松屋とか丸井とか、あのへんを見ておりますと、もう若い人が洋服の感覚で着物を着る、これは非常にエキゾチックなんですよ。自分たち今までやつてなかつたことだから。だから、我々が言つてて今までの伝統の着物とは違う、全然違う切り口で見てるわけですよね、着物を。

深津 夢工房のほうの仕事をします。本当はそういうほうは専門分野じゃないんですけどね。あれ、全部トータルで売るんで、単品だけではやらないんですよ。衿、帯じめ、それから、あれ全部こさえるのに、なんか随分大勢のスタッフでお見えになりますね。だから、今んとこ、うまいこといつてんじやないかという気がしますけどね。

池田 私、じゅらくさんの展示会をちょっと見てきてるんですけどね、着物をつぶすということじやなしに、形を変えるということが着物が続いていくのに必要じゃないかなと。一番大事な点やないかなと。今こちらがおっしゃったように、機能的でないということがやはり私の姉なんかからの話を聞いても、しんどいことがあります。

河合 ようやくね、それも試行錯誤でしてね、ニューキモノっていうのは、もうそれこそ戦後早くから出てるんですが、やっぱり美しくないとダメなんですね。だから、単に形を変えるだけじゃなくて、コーディネイトされた美しさというか、ハーモニックな形が出てきて初めて、皆にわかつたんじゃないですか。その若い人に共感を得たといふ。これ、大変な努力したんだと思いますよ。今



のじゅらくさんの着物というのは、あれ、帯のない、二部式の着物ですね。これは呉服屋さんの店頭で売れないんですって。ところがじゅらくは全国を持ち回りまして、そして直にお客さんを招んできて、お客様に直に着せた時に初めて、いやあーこれはいいわね、楽だわね、ということでお買ってくれて、そんならというので呉服屋さんはついてきたということですね。だから、逆に言つたら、専門の呉服屋さんの手を通すよりは、一般の方たちの共感を得たために成功したとおっしゃいますね。そういうもの、いっぱいあるんちがうかな。

**池田** 去年の春ですけどね、和装なんとか、ちょっと展示会の名前忘れたんですが、和装振興協会がやってる産業会館での着物ショーで、二部式の着物を舞台でやつたはるわけです。もう非常にええ感じでね。からし色の、二部式で、帯は銀色で、というような、それも結ぶとここまで自分でやってね、演出がええ。パツとこう、テニスの格好のまま、それを上からパツと羽織つて帰るというような感じのショーをやってられましたけどね。確かに努力されている。そういうなんがやっぱり共感を得てるんだろうと思うんですけども。

**岡本** 若い人は着物のコーディネーションがわからない。だからセットになってるものを選んでるんだろうというお話もありますが、二十歳から二十五歳ぐらいまでの人がたくさん着ているらしいです。で、もう一つは、ポリエステル系で丸洗いができる、そして上下全部揃えて、一番最初出た時は私、大丸へ見に行った時で十二万五千円

でしたね。それから今だいたい高いので二十五万円から三十万円ぐらいで売られている。そして、ぱッと見て、あ、これいいなと思うたら、もうそれはすぐ着れる。ですから、今の時代には適切でないかと。これは一過性ではなしに、私はずっと一割なら一割で残していくんとちがうかなと思うんです。

**小山** そういうえば、洋服のトータルファッショングです。今ワールドなんかの販売方法としまして、全てやっぱりトータル的な販売方法をしてます。例えばワールドに入りますと、全てセットされて、その言うなりに販売してる。そうすると間違いない。それは雑誌や何かで宣伝する。そういうような商売がよくなっていますね。

**山本次** 要するに、ニューキものが少し洋服に似通っているから、着よいんでしょうね。

**西川** 私、去年でしたかね、KDKのファッショングショーニを見ていただいたんです。一つね、感動したことは、ワダ(エミ)さんの作品を見せていただきました。あれはね、京都のね、格があつてこそ出来ることだし、ワダさんの作品は世界で賞をもらつた、着物で賞をもらつた作品です。あれはやっぱり美しいしね、完成されたもんだし、元禄時代のムードでいうんですかね、ラフで着やすくて、そして日本人の体型にバランスがとれてる。で、洋服も同じですけどね、和服も、伝統の良さを一つ残しておいて、その上で若向き志向にいたらしいんじゃないかと思ひます。

**河合** 着物を着る物と考えたら、もっと自由でいいわけですよね。

西川 だから、ニューキものというのはね、なんだかね、着物のやり直しいう感じでね。やっぱり芸術性が高くないと。

## エキゾチック日本

池田 この間、永六輔さんの話を人間動物園で聞いたんですけどね。昔は前で帯を結んだんです。今の着物はそれを継承してない。伝統いうのはとても変えられへんといってますけど、実は、今の着物は昔のと随分変わってきてるんです。今の着物の形はせいぜい百年ぐらい前からじゃないですか。

河合 今の着物は大正ですよ、お太鼓をね、上のほうに上げて結ぶのは。もっと皆、明治には低かっただんですよ。

上田 そして明治の頃でもね、まだなんか元禄とかいうのが流行ったりね、なんかちょっとよくわからないんですけどね、母とか祖母なんかが言つてるのは、派手な人は、髪結いさん行つて、こうい首の線の方にはこうとか、それぐらいやはりトイレタルにおしゃれをしたものらしいです。

稻田 私、思うんですけどね、着物にこだわりすぎると思つんですね、実際に。僕ら実際に着物に携わってる者ですから、やっぱり先を見た時にね、着物はやっぱりこのままではいざれにしても先細りになつてくるのは事実やと思いますね。だから、一遍ほんままったく裸にしてもらつてね、このへんは反物にも、染めあがつたものをね、これを結局若い人に着せたらどういうふうに着られるとかね、そこらへんをもっとデザイナーの人があ

ね、やってほしいなと思いますね。例えば着物に帯がなくてもいいと思うんですね。今のジーンズの上でも着られるもんとかね。

上田 ゼロから始めてみたいということですね。

稻田 そうです。だから、安くてもいいんです、うんと。綿使つてもいいと思うんですね、この場合はね。綿使つて、結局ジーンズの上でも着られるような、例えば、外国から来てでもね、あ、これは着やすい、やっぱり日本の染めもんていいもんだなど、買って帰れるようなもんがほんとは欲しいと思うんですね。

ただ僕らもちゃんとする時にはやっぱりネクタイしていかなあかんし、きちっとしていかなあかん時はやっぱりきちんとしてなあかんでしよう。それと着物も一緒やと思うんですけども、ただ、今は普段着がないと思うんですよ。その普段着は、もつと形を崩してもいいし、もつと着やすい、素材ももつともつと安いもんでいいと思うんですね。

そうして、その人たちが三十代、子供ができた時には入学式とかに、帶きちつとしたもん着ていけばいいと思うんですね。いきなり若い人にも帯して、こうしてと着せようと思うから、僕は間違いだなと思うんですね。

岡本 それがスタートラインのニューキものという形なんですね。そこからスタートしていくんではないかと思うんですね。

河合 やっぱし着るということは、こんなに自由なんですよ、といふね、アピールをしないとダメなんです。その時点です、今は。

西川 今ね、ピンクハウスとかね、ビギとか、あ

あいうね、ブランド志向でこの頃やつてゐるでしょ

う。今これ半分ぐらいに売上落ちてるんですね、東京だつて。もうそろそろ個性志向というのか、なつてきていますからね。そこをうまくつかまえたほうがいいんじゃないのかしら。

河合 そうですよ。もつと自由であつてもいいん

ですよ。自由にね、いろんなことをやつてもいいし、それからブティックで売つてもいいしね。で、私は、まず初めに、自分も含めてやっぱり着てみないとダメだね。（笑）

だから洋服ダンスの中にね、洋服入れてるでしょう。その洋服ダンスの中にあの着物が入つた時、ほんものやと思うの、私。それをわざわざ着物やと思うて違うとこ入ってる限りはあかんのですよ。

西川 一月、二月ヨーロッパ行つてきてね。カル

ダンの男性のショーケーを見たんですけどね。男性の服はもうこの頃真っ裸の上に毛脛出して、胸毛を出して、背広をボンと着せて出でてきますよ。そんなようなファッショングが、もう向こうで出でるんです。だから、概念的に、日本の着物と同じで、英國の伝統で決められた背広をというものが、今まだ日本に定着してますけど、向こうではそういう感じです。

稻田 ちよつと今お話を出たので、男の人も着物を自由に着られるね、そういう店があつてもいいと思ふんですね。そこらへんから考えると、僕らより、うんと高いものを着てますわ、二十歳前後の子いうのはね。そのへんが着物では結局上つぱりですかね、それを、いろんな形でもつと自由に着られるようになつてくると、女性も必ず動くと

思うんですね。

山本次 結婚式にね、皆タキシードとモーニングで出ますけどね、やっぱり若い子、うちの息子もこの間結婚した時に、やはり紋付、羽織袴というのを着たがりましたよ。あれで、やっぱり着たらいい男に見えたしね。（笑）

西川 そら伝統の血がそうさせるんですわ。さまであります。若い女の子でもね、着物着せるとね、外人に着せるのとひと味違いますね。

木曾 それとニューキものが、今売れてるついてい

うことを皆さんおつしやつてますけども、確かに売れている。じゃ、そのニューキものというものを皆さん何かということをおつしやつたら、二部式から、それから今のポリエステルまで全部含めてニューキものとしておつしやつてます。でも、そういうのは、まさしくそのポリエステル素材の着物なんですよ。今僕らが着ている着難い着物が、ただ素材が変わつて、色が変わつただけなんですよ。別に着やすくもないですよ。で、二部式の着物は、若い女の子は、ニューキものとしてとらえていない、ところが我々、要するにある程度の年齢に達した以上の者は、それ全部一緒にたにして、ニューキものというとらえ方をしている。ここに少し発想の違いがあるんですね。

木曾 そのセットについてもですね、これが数年したら、もうそつじなくなりますよ。着物は夢工房、帯はどこそこ、何はどこそこという形になります。僕ここで断言するんですけど、そうなりますよ。今は、ただ今は始まつたばかりだから、



セットになつてくるんです。なぜ、そういうことが始まつたかということは、若い人たちは先程おっしゃったように、エキゾチックなんですよ、日本が。彼らは從来の日本人じゃないですね。だから、そこらへんをはきちがえたら、よくないんじゃないかなと思いますね。

西川 ああいう辻が花染とか藍染ね、あれはね、私たちの業界、私ら洋服やつてきてね、やっぱりその素材を生かしてね、ニューキものでなしに、ニ・ユ・洋服ですわ。外国へ持つていく場合ね、この間、韓国へ持つて行つたんですけど、反対に韓国からは、キルティングのものをどんどんもつてきましたね。だから、やっぱりその国で生まれた生活の知恵の服が洋服化されたものでしたね。

稻田 着物の場合はね、絶対に一つの要素があると思うんです。着物の形にした場合ね、品があるということも絶対条件やと思うんですね。結局服でない味を味わうんですからね。だから、それがはずれると、絶対おかしいってなつてくるんです。

河合 成人式でいうのがありますね。あれが着物業界のドル箱だったんですよね。それが最近ほどレンタルになつちゃったの。やっぱり時代の流れですね。

## 衣の源流から

田村 さいぜんから話聞いてましたらね、ニューキものは從来からの着物に対し、異端というか、違うみたいな感じで、お話ししておられますわね。今のニューきものの場合はね、若い子がもうおしゃれという感覚で求めておられるんですね。着物と

いうイメージもあるけども、それよりはずつともうおしゃれのほうのパーセンテージのほうが多いような感じでね。

山本次 うん。だから、着る物という感じでね。小山 これから洋服も着物も、着て行く場所がいことには発展しませんし、その着る場所ということですね。そして目的、着る場所、そういうようないところがたくさんあると必然的に売れていく。河合 いま、旅をしたいというのが一番なんですよね。特に、四十、五十、六十の人たちね。京都へいらっしゃる方が多いですよ。なんか京都にいる人は行くところがないって言うたらおかしいような感じですけど。

山本達 まあ私の京都の事務所が北山にあるんですけど、日曜日なんか仕事で忙しくて出ていったら、もう人があふれていますよ。だから、確かにうちらの息子なんかでも、どこへ行つてのかしらんけど、朝出たら晩まで帰つてこないぐらい行くところがいっぱいあるんでしようけど、いわゆる四十以降ぐらいの熟年といいますか、中年なんていふのは、京都でそういう着飾つていくホテルもなにんじないですかね。

僕は一遍自分がタキシード着る回数の合計をとつてみたんですけど。回数とどういう目的で着たかというと、一年間のうち京都で十二回ほど着て、全部結婚式です。いわゆるパーティというのはないんです。だけど、大阪や東京はそうじやなくて、そういうものを着ていくパーティがありますね。それと、あのあたりいくと、やはり女性もカクテルドレスなんか着られても似合うような、「空間」

がありますけども、京都のホテルで、カクテルやイブニングを着られても、あんまり雰囲気的にも合うような感じじゃないですし、その後もちょっとどこか行こうかなというところも、中年、熟年が行くような場所は、決してあるとは言えないと思うんですけども。

稲田 外国から来てもね、実際京都では、ね、指揮者にしても、すばらしい人がきても、京都では弾くところがないと。結局皆東京なり、大阪なんです。

辻 いろいろなご意見を伺いましたんですが、私の青春時代はモンペをはくというふうな時代でしたんですが、過去を振り返ってノスター・ジックかも知れませんが、原点を見つめて、それからまた新しいものが芽生えると言いましょうか。いいものは残すとか、おっしゃっていましたけれども、私はある商社おりましたんですが、

向こうから、フランスのデザイナーが一月に何回か出てきてたんですね。そしたら彼女たちは何を買って帰るかといいますと、おかしいんですよ。労働者の皆さん紺のモンペとか備後とか、そういうふうな、岡山で作られたような紺、ほんとの紺じゃないんですけど、イミテーション紺とか、半纏とか、あれをすごく喜んで持つて帰るんです。おまけに地下足袋ありますね、あれもたくさん仕込んで、これも安い、あれも安いて言ってね、いろいろ持つて帰りました。ですから、もっと足下を見詰めて、いいもの、いいものと言いますけれども、そのへんのこともなんかの参考になるんじやないかと思います。きれいなものに憧れるという

ことの逆になりますけれども、これも新しいひらめきの原点になるんじやないかと思います。

塩山 先程からニューキーのことが出ておりますが、これは洋服と着物との中間で、相乗りな感じが致しますんです。着物は着物でとってもいいところがありますし、洋服は洋服で、機能性とかいろいろいいところがございますので、全然別な、その着物から脱皮した、洋服から脱皮した一つのデザインを、新しいデザインをつくりたいと思うんです。

小山 この衣服にはクラシックなものと、流行のものと、二つの立場というものがございます。で、流行ばかりに流れずに、ほんとのいい暮らし、基本になるものを忘れないで、衣服というものの極限までいけたらなと思います。

今日は長い間、ありがとうございました。

#### ●出席者（発言順）

西田永子	（一般）	田村義一	（日　国）
中橋貞子	（KDK）	山本達哉	（建築）
上田年子	（KDK）	辻 美菜子	（KDK）
河合 玲	（KDA）	塩山秀子	（KDK）
深津昭夫	（日　国）	大北捷一	（日　国）
池田敏彦	（一般）	梅沢弘子	（KDK）
岡本 透	（一般）		
小山道子	（KDK）		
山本次枝	（KDK）		
西川昭子	（一般）		
稲田勝彦	（一般）		
木曾宗統	（KCC）		

## 生活空間での工芸

# ものづくりから ものひろめへ

伝青

谷口主 私、伝統産業青年会の谷口主嘉と申します。今は伝統産業青年会の中で色紙、短冊の青年会から出向しております、色紙とか短冊とかを作っているメーカーにおります。

鈴木 どうもはじめまして、鈴木と申します。以前はエンジニアをやっておりまして、三十九歳の時に脱サラで陶器を作り始めたわけです。実にまだほんの駆け出しなんです。それで一面、今ちょうど三年ほどになるんですが、哲学の道の方で小ぢな工芸の店をやっているんです。

松原 山科のほうで呉服製造をやっております。

去年の八月から製造にあたって、それまでは普通の悉皆屋的なものをやっていましたけども、いろんな分野からの情報を集めてきて、新しいものをつくろう的なことで動き始めたんです。松本 松原君と同じように呉服のメーカーで彼とコンビを組んで今商品企画をやっています。

逆井 逆井宏です。本職はインダストリアル・デザイナーです。

片桐 片桐嘉正です。谷口さんの説明の“ものづくりから、ものひろめへ”という、それと座り仕事というところでどちらの方へちょっと急遽变更させていただきました。

岩崎 私は京都市役所のほうで経済局の伝統産業課という、余所にあまりない課にあります。

柴田 実は伝青とは非常に深い関わりがありまして、京都信用金庫の地下に事務局があつた時代から知っております。

伝承新形  
祖父から孫へ  
師から弟子へ  
メディア・ミックス  
所作・パフォーマンス  
ミステリ・アクション  
座・伝承 ザ・伝承

藤木 密室の伝統産業から全くかけ離れた、それも洋服のほうの仕事をです。

谷口秀 一番最後になりましたけど、伝統産業青年会の副会長をやっている谷口です。陶磁器、卸のほうになります。ですから今現在は職人さんに品もんをつくりていただいている立場です。以前は私もつくれてたんですけど、現在はつくれらず、見本づくり、指示するほうにまわってしまいます。

ただ、今日この三番目、“ものづくりから、ものひろめへ”っていう形ですけれども、これにとらわれると、ただ単にフリーディスカッションみたいな形で、なんしろ先程も言ったように、普段座り仕事の人たちが伝青自体七百人からいるんですけれども、大半の人が座り仕事の人たちばかりなんです。情報がものすごく偏っているんじゃないかなと思います。そこらへんをもうちょっとなんかこう、アイデアというんですかね、つまりいろんな意見が伝青自体から出てくるべきなんですね。

鈴木 今四十ぐらいのものづくりの人っていうのは、私のところでも今十数名、仕事をしてもうっていますが、その人たちの年齢がだいたい四十前後というところが非常に多いんですね。そういう方々ってのは今生活が大変だっていうのがあるんですね、ひとつは。特に伝統工芸の場合、もちろんお父さんの代、お祖父さんの代からなすっている方で相当資産をお持ちの方はいいんでしょうけど、新しく始めた人ってたくさんいるわけなんですね。そういう人たち、今の四十代ってのは大変なんです、ともかく。食べていくのに



ともかく精一杯。むしろそこへいっちゃってるんですね。なーんにも考える手がないというのがどうも実情のようなわけ。

片桐 まあ基本的にはやはり十二、三年、これは着物業界ですね、着物の図案の場合なんんですけども、やはり十年から十二、三年の修業を経て独立という形になりますんで、独立した時点でもう三十二、三から五、六、そういう業界なんで、まあ先程、私年くうて四十四歳で言いましたけども、私たちの年ではまだ厳然と青年部なんですね。

谷口秀 今片桐さんから言われたように、提案になるかどうかわかりませんけれど、私自身いつもいろんな公募展やらなんやかや関ってた時なんか、工芸全般が生活空間の中で点でしかないのが多いんです。点からせめて面、もう立体までもつていけへんかな。いつも工芸言われると、この品物はいいですね、だけど一点豪華主義で、その付随する生活空間でいうのが何もないと。

鈴木 今、店でね、時々私も一日店へ売り屋さんに出るんですけど、昨日も一日出とったんですけど、何が売れるかとか、お客様が何をほしがっているかというと、单なる物じゃないですね。

一年前と較べて今年というのはね、ざっと私の店で今三倍ぐらいの売上あげてるんです。それはある時、考え方すっかり変えましたからなんです。はじめはコーヒーギャラリーしてたんです。きれいでディスプレーしたわけです。どなたが見てもわかりやすい商品がある。どれもこれもきれいですよ、という形をしたわけです。お客様入ってこないです。まったく売れないと、で、すっかり店

変えまして、若い女の子にディスプレー思い切ってやらしてみたわけです。そしたらお客様がとりあえず入ってきてくれるわけです。で、ともかく金工のブローチやなんかでも今までそれが作品風に並べてあったのを、もうごちゃまぜにしまして、染めも織りももう陶器も何もかも一緒にしゃって、パーと自分の住まいのような感覚のディスプレーに全部変えちゃったんです。そしたらお客様さんどんどん入ってきて、どんどん売れていくわけです。

谷口主 私思いますに、儲からない、儲からないというふうに言う話なんですが、確かにその商品がいかに社会に貢献できるか、いかに人のためになっているかによって、その商品にたずさわる人が儲かるか、儲からないかということが決まってくると思うんです。ですから、私の言いたいことは、伝統というものはやはり役に立たないような伝統は、もう消え去ったらええんやと。しかし役に立つような伝統は、日本の心、京都の心を代表するような伝統は、この情報化社会の中で情報の中に乗せて全日本、全世界に広めていきたいというのが私の夢ですので。

鈴木 だから、結局ね、今のお話で、ある程度マスセールにのつけるような形にならないと宣伝もきかないし、売れないとことになりますが、ある程度マスにのせようと思うと、これは工場生産なのか、工房生産なのか、作家のものなのかという、そのへの規模の問題。だいたい京都の街っていうのはご承知通り、ほんと皆さん職人さんばかり集まつたような街ですから、少なくとも



も工場生産にしちゃいけない。そうすると規模としてはやはりどうしても工房生産、スタジオ生産の規模でないといけないじゃないかと思うんです。

藤木 今着物の世界でも大正ロマンというね。

鈴木 ええ流行ってますわね。

藤木 つまり、あれは昔のお女郎の着物ですわね。あの着物がものすごく脚光浴びてますけどね、僕は全然着物には関係ないんですけど。ひとつもい

いと思わないんです。

鈴木 ただ、どうなんでしょうかね。例えば若い女の人の持つてるお金っていうを考えますとね、やっぱりいわゆる呉服っていうのは買えないんですよ。やっぱりニュー着物でないと無理なんです。これは、ポリエステルで一セット揃えて十五万から二十万も出せば全部そろっちゃう。そうするともうだいたい洋服感覚で、プレタポルテとして買える。

## 京都は日本である

谷口秀 また視点が違うかもしませんけどね。

今まで京都 자체が百の売上があつたら、京都の生産額っていうのはなんぼあるのか知りませんけど、トータルしたら、その中で京都としての宣伝費を使うてるのか、ものすごく疑問を感じているんですよ。

藤木 京都市は本当の伝統、伝承も含めてね、伝統産業を守っていこうとするというような、ものすごく積極的なもんあるんですか？

岩崎 その点は尺度の問題ではと思うんです。我が家がする場合については直接個々の企業の方のお

手伝いするのはやりにくいんですね。一企業に行政が予算を投下するというのは、どうしても業界といいますか、団体の話になりますんで、それと先程明日お金になるものでないと、というような意見が出とったんですけど、どうもそういうものはやりにくい。正直申してやりにくいです。一年後、二年後、場合によっては十年後というような射程で考えます。

鈴木 いや、私ね、その点で行政に伝統産業でもなんでもそうですけどね、文化でも。僕は行政にオンブされないと育てていかないようなものは滅びていくと思いますね。そんなの意味ないです、はっきり言って。行政がなんか噛んでくれなきやできなっていうのはほんとの甘えだと思いますね、これは。そんなものは滅びたっていいと思います。

藤木 だけど、現在残っているものは、行政じゃなくとも、なんらかの応援がなくてできませんよね。

鈴木 いや、僕はそんなことないと思う。だってね、まあ確かに為政者がある時京都の街ってのをつくったかもしれないけれど、やっぱりね、地盤を支えてくるのはね、毎日のそこに住んでる人たちの生活が支えているんですよ。行政が支えてんじゃないですね。道づけはしたかもしれません、確かに、ある時期ね。だけど今の時代はね、もうそれも極端に言うたら飛び越してしまってぐらいつくり手に迫力がなかつたらね、そういうものは残らないと思うんです。

谷口主 鈴木さんのおっしゃるのは、まずやはり

売れる必要があるということをおっしゃるわけで、藤木さんがおっしゃるのは、いや、それだけでは寂しいと。そうじゃないとやはり伝統というものをなんか残しておきたいということだと思うんですけど。それはやはりどちらも大事なことだと思いますけれども、そこで、伝統というのは何かということになってくると思つんですね。例えば今売れるもんが京都でつくれると。例えばこれが同じものが韓国や台湾でできたらええやないかと。それ売れたらええやないかと、なんかそれでは寂しいということになると思うんですね。そしたら、どういうふうなのを伝統として残していくかということになりますと、さっきも言いましたように、やはり日本人の心だと思うんですね。ところが、その日本人の心とか、日本人としての誇りとかいうことになってしまいますと、非常に政治的な匂いがしてきましてですね、やっぱり市とか府とか言いますと、なかなかそういうことができないというふうに思うんです。ですから、その京都の伝統産業にたずさわっている人たちからそういう声でいいますかね、そういうふうなものが起きてきて行政を動かすというような形になるのが本物だと思います。そうなるとやはり日本人がこのようにしてあるのかというようなことをやっぱり見直してやっていく必要があると思います。

**柴田** ちょっと違う話ですけど。儲からない話でつまらんっていう感じなんですが、ちょっと外してですね、別の話しますけれども。ヤマハという会社の仕事、僕ら三十年来やってますけど。音楽

教室をつくって楽器を買わせる。いわばプレマーケッティングといいますか、要するに買う人をまず育てて、それから刈り取るという、耕すという部分が先行した非常に顕著な例だと思います。

現在どうなってるかといいますと、もう人口が減って、子供がいなくなっちゃって、もう横這いになってるだけですが、だけど、そういうシステムとしては非常に有効な投資であり、有効な文化の育成という形で実ってる。ですから、今テレビに出てくるタレントっていうのは、ヤマハのフェスティバルから出でたのが非常に多いですね。これは、もうほとんど宝塚ですよね。ですからプロダクションが育てるよりもはるかにいいものがタレントに出てくる。それで京都といつより、京都は日本であるというふうには言うて歩いてるんですけども、僕は「物論」の前になんで「事論」を言つてゐるかというと、やっぱりね、華道とかね、茶道とかね、それから能楽とか、そういうソフト、そういうパフォーマンスというものが存在してはじめてそれに必要な道具がついてくる。

**鈴木** なんかむしろね、最近私とこ、風呂がつぶれちゃったもんですから、また木の風呂探したんですよ。普通のなんですか、檜のね。ところがガス屋さんがね、工事屋さんですか、電話してもね、ないって言つてますよ。カタログにちゃんと載つてるじゃないかって言ってもね、あれじゃまくさいんですね、一台だけでは。こんなもん値段が高いのに、早くつぶれるからやめなさいの、ボリバスにしなさいの、ステンにしなさいの。ダメだって、絶対木でなきゃいけないんだって言って、そ

の木の風呂を取り寄せるのに一月かかっちゃった

んです。

お風呂屋さんは喜んで持ってくるんですよ。なぜかといつたら、自分とこのお風呂が売れたって喜んでくるでしょう。ところが中間業者がね、扱わないんです。マージン少ない、手間かかるて、あんまり利益あがらない、ポリバスなら一日でパーと誰でも行ける。そういうとこあるんですね。そのほうが確かに、ああ矛盾してるなって思いましたですね。ですから、やっぱりそういうところにこだわって、例えば今の例じゃないけれども、皆が内需拡大につながりますので、大いにこだわってもらいたいですね。

柴田 日本中があつて、京都だけないって感じね（笑）。だから比較しないと物って見えないんでね。

饅頭だってこうやって並べるから大きさがわかるんでね。一個の餅いくら見ても、だんだんカビが生えてきたとこういうことになる。

逆井 京都の人のがね、すごく情報の発信が下手だったっていうのはつくづく思いますね。それは例えば、西武電車っていうのが池袋から、あるいは新宿から出でますね。あれで中吊広告なんかに出でくる地蔵さまが埼玉県の奥のほうにあるわけですね。それでせいぜい三つぐらいこう並んでいると、京都から見れば誇大広告ですよ。それをね、さもファンタスティックに、いかにも行きたくなるようにちゃんと情報として提供できるわけですね。三つぐらいの地蔵さん、京都ならそんのへんにちょっとあって、いくらでも見られるわけですね。それが東京での情報の発信の仕方なん

柴田 それで祇園町の商店街の連中が言つてんだけど、四条がアーケードつけるって言つて焦つてゐるのか、全然焦つてない。むしろ今もうちょっと売り惜しみしたほうがいいんではないかと。お茶屋さんっていうのはもう一生とにかく入らせてもらえないっていう（笑）ミステリーがあるほうが売れる。だからね、売り惜しむつていうのがあるんですね。売ろう、売ろうとすると、自分で穴を掘りはじめてね。だから売り惜しむつていうことは何をしたらしいかというと、いわゆる伝統産業ブーム、オイルショックの後に輪島が立ち直った時に、なんであんなに受注がきたか。

これはね、不良在庫にならないものというのは流通でもね、ストックできたからなんですね。

### 着物でディスコ

松原 話は変りますが、僕も島根県からこっちのほうに来たもんですから、夢、伝統産業しにきたわけです。友禅をしに。それで実際に会社に入つてみると、それが僕は手でやつとるような仕事かなと思ったら、実際には機械も使つてる。それとか、材料も木とか紙であったものがビニールとか、そういう新しいものに変わってきてる。僕は最初にそれでショックを受けました。今は営業の仕事をたずさわっているわけですが、営業ばっかりとちがつて、職人の夢を捨てないようにして、実際に自分でも職人と同じようなことをして現在もやつとるわけですね。で、確かにい



ます、実際に。だけども、結局さつき出たような話で、誰が認めてくれるかいうところですね。消費者のためにつくつとるけども、実際にはそれまでの流通段階のところで評価されてしまつて、次に渡らない。

松本 ずっと皆さんのお話聞かせてもらつて、感じたのは、僕よりも経験豊かな方々だし、一番思つたのは、皆正論だと。その通りだなと思つて、じゃなんで皆問題抱えてんだろうなと。そこまでわかつてゐんだつたら、なんで今こんなに苦しんでるんだろう(笑)。

それにね、「関西学生着物振興会」という団体がありましてね、学生ばかりが集まつて着物を売つてゐるわけなんですね。よくスキー・ツアーやとか、そういうプランを立ててアルバイトのかわりにやつてる連中がいますけど、それが今度は着物を売ろうと。なんでかといつたら、その代表者とちょっとだけ喋つたことがあるんです。あんたたち着物の売り方が下手だと。学生のアルバイトのほうがずっとうまいよ。何やつてるかというと、例えはディスコを借り切つて、そこでディスコの着物パーティをやるんですね。着物を着てきなさいと、なかつたら貸してやります。着物窮屈だというと、ディスコでも踊れますよと。そういう発想っていうのは僕ら最初聞いた時には、僕なんかはやられた!と思つたわけですよね。うちのえらいさんとかに言わすとバカじゃないかというわけです。でも、そのバカなことが実際あたつているんですね。

面白いのは、僕はそれとは全然関係なくて、室

町の問屋筋、メーカー筋の若手ばかりである団体つくつてんんですけども、その着物を、関西学生着物振興会がやる二年ほど前にディスコパーティをやろうと、着物を着て、一回そういうことをやってみよう。その業界筋だけに声かけたんですがね、誰も来ないんです。で、結局皆洋服で来ちゃつたわけなんです。ところが、関西学生着物振興会は素人にといふか、一般に声かけたんですね。皆来るんですね。業界で着物を本当は売らなきゃいけない、振興させなきゃいけない連中に声かけたら、皆いやだ、いやだつて逃げちゃつた。そういう人間が集まつて着物を広めようといったって、これは無理だなと痛感しましたね。

谷口秀 話としてはまとまりなく、私自身もまとめられる能力もなかつたんで、すみませんけれども、また続き、また食事でもしながらいろいろとお喋りいただいたらと思いますので、今日はありがとうございます。

#### ●出席者（発言順）

谷口主嘉	(伝青)
鈴木宗敬	(一般)
松原義美	(一般)
松本良	(一般)
逆井宏	(一般)
片桐嘉正	(日図)
岩崎猛	(京都市伝統産業課)
柴田献一	(KDA)
藤木武久	(日図)
谷口秀一	(伝青)

7

K-I-S・I-C-C

# 工芸情報は 国際メディア

情報はタダか

**本郷** 実際、この建都千二百年というのは、京の都に、平安の都になってから千二百年になるということはわかつてゐるんですけどね、それに向かって一体何をどういうふうにしていくのかというようなことは、なかなかよくわからないということがあります。そこでこの二時間半を「情報」の分野と、それから「国際化」という、この二つに分けて進めていきたいと思います。前半の情報につきましては、小川さんに担当していただきまして、後半には黒竹さんに担当してもらいまして、国際化の問題について進めていきたいと思います。

**小川** 今日は、全分野に情報という言葉が入つてますけれども、やはり百年、二百年前のことを考えてみましたら、京都が都であったということとともに、各分野の方々が京都にどんどん入ってきた。同時にまた技術も入ってきたという、そういう技術交流があったということですね。それから人的な交流があつたということ。ところが現在はそういうようなことが行われなくなつて、東京に中心がいったきりというようなことになつてきましたね。やはり情報というのは人間が行き来するところにまず生まれてくるのではないかと思うのですがね。柏木さん、如何ですか。

柏木 どこへ行つても一番先に喋らせてもらうんですけども。なんか開発、開発言つて、急に最近、開発言つたら私の名前が挙がつてきたり、ちょっと

と京都新聞に載つたのと、K-I-Sに発表したのと

がどっしゃになつて、皆さん同じように思われてるんですけど、まあどっちにしても、たいしたことないんです。たいしたことないんですけど、要するに基本ニーズというのは前からあつたんで、それに対して、出会つたのか、出会わなかつたか、同じ出会つても情報を取り逃がしたかどうかの違いだけやないかと思ってます。

**松本** 仕事関連ではないんですけども、情報といふ場合、特にどう伝えていくかということで、いろいろ考えたりするわけですが、京都のコミュニケーションシステムというのは、流通の仕方がかなり口コミ的であつたり、まあ人との出会いの中で生まれてくると。そういうのがかなり重要なウェイトを占めているというのがありますけれども、逆にマス的なイメージであるとか、そういう全国的な規模のイメージであるとか、情報といふのは東京方面に集中している。まあ京都は多分情報がなくつても、全国的な情報の中で充分暮らせてしまうという、そういうギャップはありますね。

**小川** とにかく、消費者をあまり意識しないといふか、そんなこと言うたらいかんのですけど、今度は当然、使い方わかつて当然とか、ね。これがいいと思われて当然やとか、そのようななんかつくり手だけの側からのものづくりというのが、長年京都ではあるようです。

**東田** 私も一年間ほど工房をスタッフに任せて、できるだけ世の中を見てみようというので、一年ばかりまあいろいろと、東京はじめ各地へ、イタリア・ミラノまで行っておつたんです。そういう

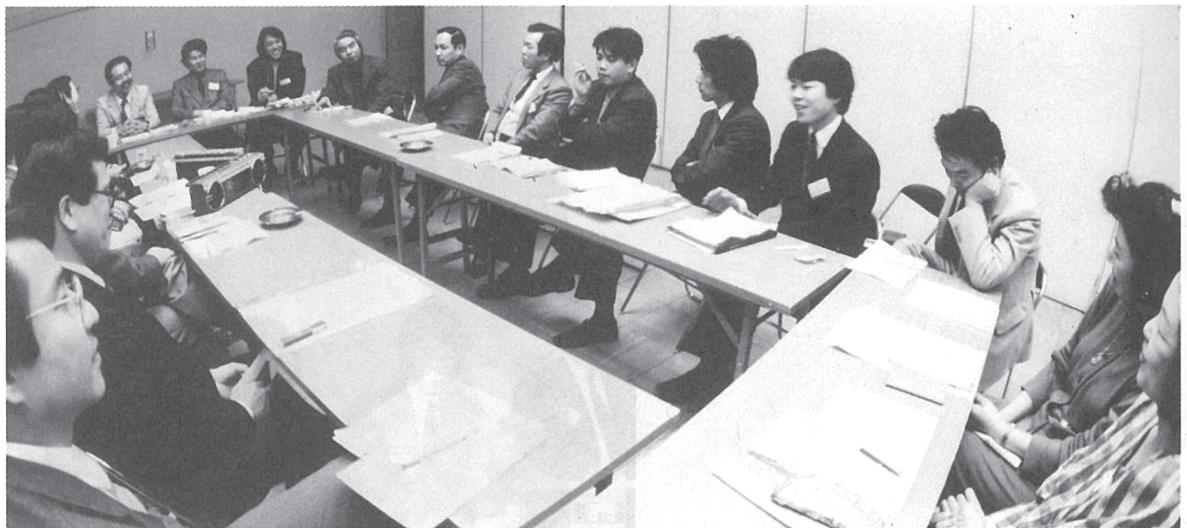
情報は有料

安物買いはソン  
ましてタダなどと

情報加工術

情報DCブランド店  
理科系文化生活法

情報DC



形で一年間うろうろしながら出た結果、染め屋の人間であろうとも少し世に出るべきだろうと、表に出てもいいんじゃないかと思いつめます。

**二位** 私が今、知りたいなと思うのは、女性の方がなぜ着物を買うのか。確かに美しくなると、またそれを着ると気持ちがどうとか、その心をどのように着物の中に入れていくのか。その着物はこういう形でつくりましたよ、ということはつきりすれば、女性の方はそれを買われる、心を満足させするために着物という物によって心を得る。それにはやはり時代の流れの中の、ちょっと新しいもののをどう表現して、入れていくかということが今大切なんやないか。そのへんが非常につかみにくいんです。

**大村** 今、情報というお話をなんで、実はこの間もKISのパネルディスカッションでちょっと提案してたんですけどね。東京に情報が集中するという意味で、京都あたりの情報が少ないと。私も東京にささやかな事務所があって、二十年ほど東京でやっているわけなんですけど、東京は情報に対する報酬といいますかね、支払いが非常に明確に出てくる。京都の場合、今も、えらい反論するようですが、親切であったりとか、自分が話すからお前も話せと。いわゆる非常に無料のお話をね、情報の。それが随所にあるんじゃないかな。

**小川** 難しい話ですけどね。我々まだ本当にやり出したところなんですかね。やはり京都が、まあ言えば王城の地であったという。イコール大生産地であり、大消費地であったという。やはり全国から、今の東京と一緒にありますよ。商売にくる。

そしてまた都を見学にする。その時に京都のもの、京物というものを買って帰る。その時にいろんな方が情報を落として帰ったと思うんですね。

今までだつたら、都会人だからとか、いいもんつくつてんだからとか、まだ京都は王城の地やなんて思ってる人もありますし、人によっては天皇をこっちへもう一回もって帰ってほしいなんていう人もありますし。未だになんか昔のそういうような、もう以前から二代も三代もこっちへきるわけですからね。我々も孫・曾孫になつたるわけですから、もうぼちぼち昔の京都人をやめてしもうですね。一旗あげようと思うて、東京なり大阪なりへ、また外国へ行くというふうなことをやらないと。それでまた京都に情報が集まつてくるんじゃないかな。

**柴田** いろいろ伺つてまして、やっぱり一番気になるというんですか、私も京都で生まれたわけやないもんですから、一番感じますのは、情報の受け方でいうのはものすごく上手だと思うんですね。そういう受け方とその加工というのは非常に上手だけれども、日本全国、あるいは全世界への発信が非常に弱いと。

**林** 例えば情報というのは形がない。形がなくても、言葉で非常に重要なことを文章にするというようなことがありますね。デザインとか含めますけれども、例えばデザインだけという分野があるんです。私の仕事の中にペーパーデザインという、デザインだけを売るという仕事もあるわけです。ところが、京都の場合、その物は売れるんですね。物はこれいくらですという値段がついて売れるん

ですけどね。そのアイディアとか、そういうような言い方をするわけですね。

山本 今おっしゃったことはごもっともだと思うんですけども、最終的に根底には京都には先程の王城のあれじゃないですかけれども、もともと物真似の文化といった、模倣の歴史みたいなのがずっと根底にあるんですね。それはもう日本の習性的、

日本の文化そのものが模倣の文化ですね。確かに私たちの着物の世界でもそれに似たようなことが何回もありますけれども、ちょっとでもロイヤリティーを取るとなれば、もう模倣がすぐ出てしまつて、払ったとこがバカを見るような、そんな文化構成みたいなんがあるんですね。

小川 なかなか難しいところに入ってきてます。僕は先程のデザイン権だと、そういうようなものに金を出さないというところで、一番いい例が行政が金を出さないんですね、そういうものに関して。

東田 いや、あのね、ちょっと着物の業界の一つの変わり方というものをみますとね、今年ぐらいからかなり変わりつつあります。林さんははじめ他の方々がおっしゃっているように、今まで着物の世界というのは旦那衆が仕切っていた。その当時はデザイン料、あるいは考案料いうものはほとんどなかったんです。それは、京都の旦那さんというのものはものすごく文化レベルが高くて、自分でこなすことができた。ところが昨今の旦那衆は余裕がなくなってきたから、だんだんと世代交替の間に文化というものを、オーナーから発信するこ



とができなくなっちゃった。

## 受信装置・京都

本郷 ちょっと時間が過ぎてまいりますので、黒竹さんから、国際化という問題に入つて頂きたいと思います。これは国際化と情報化というのは切り離せませんから、今までの統き的な話で結構だと思います。

黒竹 國際化というのは、現在私自身が感じところで、先程、記念講演でも木下理事長がおっしゃっていたように、何かをつくっていかなくてはならないというようなことを含めて、それと二百年に亘して京都をどうするかに亘つてくると思つてます。要するに国際化ということだけ世界各国に日本のよさを表現するかということだと思うんですね。そういったことを含めて、今京都をどういうふうに活性化させかというふうなことを、これから後半考えていくべきだと思います。

木幡 京都の国際化ということなんですか、工芸的なこともそうだと思うんですけど、宗教的なことからかけ離れては京都は語れないということが特にいわれると思うんですね。そのへんを含めて考えたい。

角田 どっぷり着物の業界にいるんで、国際どころか、京都も出られへんような状態なんですけどね。うちの社長の知り合いのところにホームステイに来ていたオーストラリアの女子学生がうちのアトリエを見たいて来たんですよ。その時にたまたましてた仕事というのが、問屋に頼まれてつくつた袖見本というのを五、六点並べてつけてたわけ



ですわ。それをものすごくええて言うわけですね。うちらなんか、それを溜めといてもどうしようもないから、もうある程度溜まつたら捨てるようなもんですけども、それがほしいて言うから、何にするんですかて言うたら、なんか壁に貼りますいことで、ああこんながええのかと思ったやつが、実は問屋にはねられたやつなんですね。

中谷 京都というのは、今のおさんの意見を聞いていたら、やはりまだ未熟児的な成長をしているんじゃないかなと思います。京都は、職人でいうんですかね、作家と企業というのが両立していく、最初工芸品というのは、これは王侯貴族の一つの贅沢品みたいなものからスタートしたんだと思うんですけども、それがひとつ産業という形の中で出てくることによって、やっぱりその作家と商売するものとのつながりいうのが出来てくる。だから、京都の国際化という一つのテーマの中でも、やはり京都人はこの「京都」というイメージを変えたくないという意識、これが非常にマイナスしている。その中で、むしろ京都の活性化というのは、脱京都みたいなものを図ることによって、国際化も図れるんじゃないかと思えるんです。

山本 ちょっと、いいですか。意見をお聞きしてまして、確かにそういう見方を多々あると思うんですね。ただ、私、個人的ことで恐縮なんですけれども。去年、一昨年とスイス、それからドイツは二度ほど前に展覧会に行きました。スイスはローザンヌという小さな都市、そこで国際ビエンナーレというのをやる、織物の展覧会をやってるわけですね。この小さな都市で、それが一応世界

中から、日本からもたくさん的人が出品していました、もっと大きな街かと思ってました。しかも工場街のなかなかで展覧会をする。それからドイツのほうのハイデルベルグというのは、去年は六百年祭というので、そこでも日本展というのをやってましてね。この都市も、そんなに大きくなっただけで、そこも京都よりずっと小さい。その街がそれぞれに特色のあるやっぱりいろんなイベントをやってるわけですね。そんだけの会議場、そういう建物、器というのは立派なものがあるわけですね。古城があり、それからそういう展覧会の会場がありという形で、そういうとこを見てましたら、京都のこれからの方針も見えるような気がするんです。

黒竹 今、山本さんのお話で、やはり小さい街っていうのは割にそういう結束力というか、それができているんですね。この間も、倉敷で第一回音楽祭というのをおやりになつて、それは一週間連続でやる。これは倉敷のああいう倉というか、漆喰の壁の町並みで、その店先でミニコンサートというか、まあタンゴをやる人とか、いろんな人が集まっている。中心にアイビー・スクエアというのがあつて、そこで一つのイベントを開催するというふうな形で、割にいろんな地域から人が集まつてましたし、そのことによつていろんな情報とか、また人が集まつた。そこにまた経済というか、ホテルは賑わうし、近くのレストランとか食堂も相当な賑わいなんですね。やはりそういうことが一つの経済の活性化なんだと思うんです。

## 「京都工芸」から

松本俳 私は生け花のほうを致しておるんですけど、それとも、本部が東京にあります関係で、京都からということよりも、東京から国際性ということをよく耳にしているんです。特に草月流といいますのは、どちらかというと国内よりも海外での活躍というのがありまして、海外の方との交流がございます。それから去年でしたか、宝ヶ池の国際会議場で「生け花インターナショナル」という会がありまして、もちろんその時には全国のお家元が集まられて作品を発表するという形だったんです。

黒竹 生け花というのは、あれはスタイルとか、それはやはり日本独特のものなんですか？

松本俳 まあそうですね。特に池坊さんは一番古くて、四百年も五百年もという歴史をもっているし、その時代からというものはやっぱり日本独自のものです。

それから京都 자체で言いますと、京都の欠点といふのが特に目立つようにお聞きしてたんですねけども、特に親切かどうかということが問題になりますと、女性はすごく京都の女性というと女らしくて、しとやかで、ということになるかと思うんですけど、実際面はやっぱり表面と中身とは全然違うように思うんですね。だから、親切かと言われると、結構イケズやしな、ということもあるようです。

野々村 私は柏木工芸というところで、着物の伝統的な型友禅というものの、型紙の製作の一部で、写真製版というスクリーンを製造する技術を約十

年近く、技術屋としてやってきたんですが、その技術はある程度習得しますと、なんか自分として物足りない。このままこの技術だけで終わるのは面白くないという気持ちがあつたんです。そこで、東京のある科学メーカーの企画室とか、あるいは大阪とか、それから名古屋とか、そういうところの科学情報を収集していく中で工芸に生かせるものをセレクトしていく、何かドッキングして新しいものができないかというような形でもづくりに参画してきました。それまで私はほんまに暗室の中でうずくまっていた。それが例えれば東京とか大阪へ行かしてもらうと、いろんな人がいろんな見方で京都を見ててくれている。そしたら今度はアメリカの人はどうなんだろう、ヨーロッパの人はどうなんだろうという、そういうどんどん意欲が出てきまして、そこに私にとって一番必要な国際化は何かというと、殻を捨てるという感じ、これがなかつたら、外へは出でていけないという気持ちをもってます。

本郷 京都生まれで、京都育ち以外の人は？ 半分以上ですね。その人たちがご覧になつた京都というのはどんなもんでしよう？

柏木 私、岡山から出て來たんですが、京都が公家さんの街だと。ああいこと言うなと思って、今聞かせてもらつて、そのうちに滅びるなという（笑）、そういう感じはします。確かにね、今までずっと語られてると同じことですけど、皆すばらしいもの持つてますし、京都に文化ありますけど、そうしたらそれをどないしようと。それで京都どないしようて、皆ぎょうさん京都の文化人が

集まって話しあつたって、なんにもならへん。毎年なんにもない話をずっと七回目です、やつたはります。そういうて、金出しどうない人間ばっかりですよ。今ソフト部門に対して、やっぱりお金出したがらないといいますか、形ができなかつたら金出さない。

大村 それと外人がいののは不思議やね。これ、こんだけ「国際」ていうタイトル打つて。

小川 今ずっと聞いていて、このデザイン会議で

もそなんんですけど、京都の人に対して、日本の人に対して、自信がないのね。それで京都は、自分からなんかやろうということをせんわけです。ある面ではさつきも出てましたけど、都会でいうのはそうやと思うんですね。なにも東京でやってるのは、東京の人が東京でやってんのやないねんから。田舎の人が東京へ来て、そして一旗あげようと思うてやっとるわけです。

黒竹 それに国際性をもたらすためにも、ヨーロッパの場合は地理的に隣接しているわけなんですね。だから国際的なイベントをやってもかなり集まるんですが、日本でやるとなつたら、ほんま交通費だけでも大変。

それともう一つは、仮に、ヨーロッパの隣接した国々というようなものの考え方からしますと、京都という国がある、それから大阪とか神戸とか、あるいは東京というふうに、そこからやっぱり人が集まってインターナショナルっていうような角度で考えていいたらどうかと思います。

本郷 大変混乱したようで、申し訳ございません。皆さん言い足りなかつたことたくさんあると思い

ます。それはそれで、また次回に、今度は声を大にして思う存分言つていただき、いずれにしても、建都千二百年というタイトルでずっとやつておりますけれども、放つておいても千二百年がやつてまいります。このやつてきた時に、やつぱり今日よりも明日と、だんだんとよくなるという形にならなければ。京都の町そのものがやっぱり日本の中で輝いてなきやならない。京都の町といふものが、あるいは京都の人間、京都で仕事をする人、そこに住んでる人たちがやっぱり明日に夢と希望をもつて向かっていけるように少なくとも、デザイナーばかりじゃないでしようけれども、今のお話のように自分が関わっていることに最大限努力するということをしていきたいなと思います。長時間にわたり、ありがとうございました。

#### ●出席者（発言順）

本郷大田子（KIS）	中谷浩志（ICC）
小川裕起夫（ICC）	松本俳沙（ICC）
柏木桂（KIS）	野々村道信（KIS）
松本静明（一般）	新宮克美（ICC）
東田崇資（一般）	大誠寺陽子（一般）
二位良一（KDA）	岸本康志（KIS）
大村俊夫（KIS）	
柴田裕（KDA）	
林暁子（ICC）	
山本唯与志（KDA）	
黒竹節人（ICC）	
木幡光三郎（ICC）	
角田康（KIS）	

## 歴史が生む“色”

山本 景観都市の色彩を考えるということで、色というのは非常に範囲が広いと思います。だけど、もう少し町並みの色とか自然とか、そのへんの色を具体的に身近なところから絞り込んで、別に結論は出なくてもいいと思います。それで、それぞれの分野から自由に話し合っていただきたいと思います。

# KDA 景観都市の色彩を考える

色々あって

藤田 僕はグラフィック・デザインですが、どう

しても見方が感覚的というか、景観都市をビジュアルに見ています。

やはり京都の佇まいというのは、やっぱり色と

いうことになれば、灰色、また銀ねずみ色とか、いぶし銀かと、このイメージはやはり瓦、京の町並みに綿々と続いている屋根瓦から生まれてくると思います。それをなんか、すっきりした言葉で言えば、“利休ねずみ”という色名ですね。それに利休ねずみと共に代表的な色というのはやっぱり朱、赤ではないかと思います。

柴田 自然には三つの色があって、その土地の色、

色物 色好み 色変化  
朱の誘惑 朱の刺激  
ノスタルジック 都市ウエア

色々あって

朱の永遠

朱の永遠

朱の永遠

朱の永遠

朱の永遠

朱の永遠

朱の永遠

朱の永遠

風景、そして風土ですね。それがその土地の景を生み出している。この色彩というものを、女性の目から見て考えたいと思います。もっと身近なところで、色というものを考えますと、目立たせた色と、目立たせたくない色というものがあると思うんです。その中で目立たせたくない色で目につくものにゴミ袋がありますね。男性方はそういうことにうといと思いますが、本当に台所から出るゴミの処理は大切なんですが、このゴミ袋のカラーというものは全国どこへ行っても一緒で、京都の町並みに全然合ってない。それで、女性ばかりで、そういうものを、ゴミ袋の色から考えてみましょうというグループをつくりて、少しずつやっているんですけど、なかなか皆さんに通じないので、是非今日はそういうことを考えていただきたく思ってまいりました。

大橋 大橋といいます。私は平安建都千二百年記念協会の事務長をしていてますけども、実を言いま

すと、京都市からここへ出ておりまして、十年ちょっと前になりますけれども、京都市で初代の景観管理長をやってまして、京都のこういう景観を守らうという責任者であったんです。実際、京都の景観を守るという場合に、やっぱり大きな問題は色だったんですね。で、それは実際問題、建物のデザインとか、いろいろな事がございます。でも詰るところはどういう色にしていくかといふことで、今久谷さんがおっしゃったんですけども、フランスなんかでは、まあ極端な場合、室内のカーテンの色まで決まっている、パリのある一角では。政府も二十年前に初めてそういうこと



に手をつけてやりかけたんですけども、やはり色を決めるということ今までいかなかつたですね。それはやっぱり非常に難しい問題で、まさに色なんものは、今までいろいろお話をありましたけど、やっぱり相対的なもので、例えば、赤が派手だと言つても、今おっしゃったように、平安神宮の大鳥居なんかは、ああいう緑をバックにした中で見ますとのすゞう映えるわけですね。だから、なんか派手な色は駄目だというふうな決め方もできなんないです。

山本 先程から聞いていると、具体的な色がいろいろ出てますけど、それよりもまず京都がバランスのよい景観都市になつてるとかどうかですね。つまり、やっぱり百万人以上の人々が住んでるという事実が片っぽにあるわけです。飛騨の高山とか、一万、二万のとこやつたらね、そのまま保存してそのままいけると思うんですけど、百万人以上の人が住んでる。そしたらどういうふうにしたらいいかということで、まあ、一つのストリートを一つの統一した色でまとめる、で、洛西ニュータウンなら洛西ニュータウンでまとめる。で、河原町とかああいう繁華街は繁華街で考えて、最終的にそれがいろんな色が入ってるけど、なんか統一した意味があるとかね、なんかそういうふうにもつていかない、大都市における色彩の計画いうのは、無理だと思うんです。

真鍋 今すつと皆さんにご意見聞かせていただきて、いくつかのことが非常に鮮明に浮かびあがつてると思うんですけども。都市の色彩っていうのは、割と歴史的な経過とかね、それから住んでる人間

たちのなんとはなしのコンセンサスとかいうものと非常に関係があるんですね。だから、誰かが非常に強権的にこれがいいというふうに決められないと、いう性質のもんだということが一つ。それと、確かにパリなんかの場合には、町並みに対してもガードがあつて、そして一番最後のところが自分のものだというか。そうすると、内装にしても変えようとすると、ほんとに非常にたくさん手続きを踏まないと変えさせてもらえないといふような、そういうシステムができる。ところが、そのシステムは決して突如として出来たものじゃなくて、もうかなり、いわゆる都市生活者の歴史に見合つた期間、いろんなトラブルを起こしながら、ああでもない、こうでもないと、やっぱり百年とか、あるいはそれ以上の経過の中で出来てきてるんですね。

山本 自然の材質を使うということは非常に全部に通じるわけですね。瓦の色にしても、いわゆる土、土壌にしても、自然ですね。自然材質そのものですが、また人工的になんかつくつても、それに近い色、まあ木とか紙とか、石とか土とか、そういうことをベースにすれば、自然にそれは全て中間色になるわけです。それに合う色が、伝統的な色として朱色が合うとか、例えば花見小路の力茶屋のあの朱色がなんともいえない良い朱色なんですね。で、それで、非常に私はああいう特殊な、平安神宮とか、祇園の八坂神社のあの塗りたての朱色というのは、背景に緑がなければとてもじゃないが見られないような、極端に赤い色であつたり、これは少し色みをもうちょっと考えられ



ないのかなと思う時があるわけですね。まあ時間がたてば、当然それは少しくらいで、いい朱になるかもわかりませんけれど、最初の段階、非常に気になる朱であるというふうに考えます。それで、京都は非常にそういう自然に恵まれているところであつたんですが、特に都心部は何か他の都市と変わらない、もうほとんど変わらないような色彩が氾濫したりしますから、先程からおっしゃってるように、地域ごとに一つのまとまりを考えべきだと思います。

### 市民が求める色彩

**尾崎** あのー、皆さん非常に話が、非常に具体的であつて、具体的でないんですね。景観都市を考える、いざ今度は事を起こそうと思うても大変なことがあって、なかなか具体的にはできないんですけれども、やはり京都らしさいうのが非常に難しいんとちがうかな。京都らしさ言うても、今までは私たちのイメージはわび、さびとか、その利休ねずみとか、そういうイメージがあるわけですね。ですから、やはりこれから我々が論議するのは、新しい京都らしさいうのをね、どう考えるべきかということ。私が最初に申しましたのは、まず景観ということは、建物だけとちがって、いわゆる電車とかバスとか、そういうものも入ってくる。

**柴田** 一つだけとれば、どの色も美しいと思うんですね。周りの環境によって、その色が生きる。ヨーロッパなんかでは、昔、敷石舗装する場合、その土地の石を使った。京都もそうですね。土壌にしても土地の土を使つた。そういうものが

調和を生み出したんです。やはり自分の国の自然のものを使う時に、それがやっぱり自然に溶け込んでいく。日本の場合、日本中どこへ行つても同じ材料、どこへ行つても同じもんですね。それが風景を壊していくと思うんです。

**山本** 京都の市電に使つた敷石が、石塀小路で使われていますね。非常に溶け合つてましたね。

**真鍋** だから、私は最近よく言つんですけどね、多分、特に京都という町を例にとってみれば、先程パリの例とかいろんな例、出ましたけども、近代の都市の歴史というのが、ヨーロッパは非常に連続的にね、その色で苦労しているというか、色も含めて、意匠的にも苦労しながら、いろんなトラブルを克服して今日につながりますわね。ところが、そのへんで日本の都市はそういうシステムをうまくつくつてこなかつたというところがね、非常にあるのではないかと。色で苦労しなかつたという言い方はちょっと語弊がありますけどね。

**松田** 東京という街は高度成長時代に無茶苦茶になつたんですね。そのめちゃめちゃになつたといふことが、逆にいろんな色を淘汰する力になつて働く。非常に面白い現象なんですね。で、都市機能というものは、ノスタルジックに追つたら都市の発展というのではないので、こうするべきだ、みたいなことをやつてしまふと、よく行く場合と、悪く行く場合と両方あるんですね。これも一つの競争社会ですからね。とにかく自分たちの思うままにやって伸びて来たという歴史がある。これ、たかだかね、日本人がそういう意味で、色の美しさだとか、統一化だとか、いわゆる都市のアイデ

ンティティみたいなものを見失ったのは三十年代以後だろうと思うんですね。昭和三十年代以降。これがね、最近になってね、三十年たってみるとね、意外とそういうことは大切なことなんだというような気持ちが育つてきているんですね。ところがその手法として、こういうふうにしたらしいのとちがいますか、みたいな色彩的な面の提案がね、なかなか出来ないのが今の日本のデザイン界の実情なんですね。

**真鍋** それとね、僕はやっぱり、さっき従来の私の言つてゐる続きになっちゃうんだけれども、パリという街に街意識がね、非常に濃厚に蓄積されているからね、だから、ああいう冒険が可能になつたというようなこともね、あるような気するんですね。あのー、単純にだから、いわゆる新しい全く実験的な空間をつくるということだけでどちらえきれない。京都でそういうものをやっていく時に、必要なのは、実はその受け皿の部分でいうんですかね、いわゆる市民的な合意がね、どんなふうにして形成されるかということを抜きにして、やると非常に危険だと。

**木村** 企業でやられるそういう色彩計画とかね、商品を出される場合に、実際売れなかつたら、それはもうなんばよかつても引つ込めるわけですか。で、悪かつても逆に売るということになりますわね、企業としては。

**久谷** だから、僕なんか物を選ぶ場合に色は無視できないですね。だから形がよくても色がね、色さえ良ければ僕ら欲しいものがいっぱいありますよね。



**柴田** ですから、企業の言いなりになつてゐるわけですね、私たち。他の色に変えて欲しいと言いにいつても変えられない。いつも与えられるばかりで、ポリバケツの色も私なんかこだわるので、欲しいもの見つからないんです。

**山本** よく考えますとこの着物、シルクならシルクという素材に対し、それ本人がですね、それシルク以外では染めないとかね、そういうことを現実に聞いてるわけです。それがコットンにかわるとか、なつてくると、染め方知らないとか、色が出ませんとかいう声が返ってくるので、びっくりするんですけどね。それだけ細分化されたジャンルで、なんか専門、そういう着物の色を染めるうえにおいては、もうほんとにエキスパートですけれど、ちょっと素材が変われば、もう同じ繊維でもそういうふうに意識がついてきてないというようなところがあるわけですね。ましてプラスチックとか他の繊維、そういう新しい素材に対しては、恐らく最初から忌避しているんでしょうね。

**真鍋** ちょっと私、今さっき企業と市民のやりとりを聞いていて思つたんですけどね。僕自身はいつも思つてるんですけどね。一般的には企業横暴というのがすぐ出やすいですね、市民レベルで論議するとなれば。だけども、そういう状態というのは、実際は市民の水準、レベル、到達しているレベルいうものが非常によく現れているような気がするんですね。だから、行政なんかそうですがね。行政がやつてることに対する、非常に批判的な形で論議がされることがあるんだけども、実はよくよくそれを追究していくと、行政自身の問題よ

りは、市民の到達している、その時のね、レベルというか、そういうことがものすごくよく反映しているわけですね。だから、かなりそういう意味では見通しは暗くないといいますかね、お互いにですよ。言われたように、まさしく企業の側からしても、受けとめていく消費者がどう考えるかということは非常に重要なファクターですね。

しかしながらどうも我々の市民レベルの水準が上がっていくスピードが、どうも全体の流れからすると、もうちょっと早くならないかなと。その早くするためには、何かいろんなことをやらないといかんではないかなという気は私自身はするんですけどね。だから、そういう意味でゴミ袋のあのカラー、色の話ですね、非常に面白いなと思ってね、感心したんですけどね。そういう、加速していく一つのファクターとして、やっぱり非常に注目するような要素がありますね。

## 変化する色、永遠の色

松田 僕は色をつけんでも、良いものはあると思いますね。今カメラがね、これなんかなんどか、今まで試みてきてね、その都度失敗して、まだ黒なんですね。あれでいいですね。あのね、変えなくともいいものを、あえて変える必要はない。

真鍋 そうですね。とりわけ大きなものになればなるほどね。

今少し、かなり具体的な色論みたいなものがたくさん出てきて、比較的最初の柴田先生の話でいふと、物寄りに論議が進んだと思うんですけどね。ですから、少し事寄りにといいますかね、どうい

うふうにやれば、物寄りの論議から、少し事へ向かって動いていくというか、具体的に都市の景観を少し、なんとか少しでも前進するような方向が見つけ出せるかというようなことをちょっと論議してみたらどうかと思うんですがね。

木村 やっぱりあれちがうかな。この都市はものすごく長い歴史があるわけですが、十年や二十年ではね、もう変わらないというか、百年ぐらい先のことを考え、百年か二百年ぐらいのことを考えてやらないと、計画されたパリみたいな街は出来ないと思いますしね。そのぐらいの大きい気持ちでないと考えつて、小さいとこばかり見て、そこだけ直してやってるんでは、絶対百年後、二百年後にはもうバラバラのもんが出来てくるやろう。もっと大きいスパンでなんかこう……。

大橋 ヨーロッパの場合は、これやっぱり伝統的には石造りの建物ですね。だから、もつ長さがちよつと違うわけですね。だから、外観はそのまま置いといて、中を勝手に変えて住めるわけですね。ところがやっぱり木造日本家屋の場合は、どうしてもそういう面で難しいもんがあつてね、で、変わらざるを得ない面があるんですね。

それから松田さん、東京では高度成長でぐちゃぐちゃになったということでおっしゃってましたけど、一つだけ規制して遺したとあるんですね。それは皇居前。大阪の御堂筋もそうです。近代的なね、ビルの一つのあり方としては、まあこれから例えば、烏丸通りとか、そういう、先程は「もう勝手に」というような言い方をしましたけど、これまた一つの、つまり流れですよね。市民的な

コンセンサスがそういうところで出てくるなら、烏丸通りみたいなところはそういう建物、高さもそろえてやるというふうに方向をね、やっぱりとにかくべきやないかなと思うんですね。

松田 やっぱり自浄作用が出てきますかね。放つておいてもね。ある年月がたつたら、あれはやっぱりまずいなというようなことで、修正されてきますからね、そう恐れるほどのことではない。例えればね、先程、朱の話が出ましたけどね、これ、ハレの場の色なんですね。ケの色じゃない。日常生活まったく離れた位置での色を楽しむ、楽しみ性というか、あの色の影響をうける。

東京で外壁材の色が問題になつたことがあるんです。その時にどうして浅草寺のあの朱色に決められたという(笑)指摘をしたんですけどね。あの場所に、浅草のあの一角だから、あれが許されるんであってね、あれと同じ色を他の建築物につけて街の真中にもつてきたら大変な論議を呼ぶだろうと。だから、そう神経質になる必要もないなとういう感じがするんですね。

真鍋 だから、今言われたように、確かに変化、むしろ変化を前提としているという風土的なね、日本の建築の場合にはあると思いますんでね。まあせいぜいよくもって、百年というと、もうほとんどの家はもたないですからね。五十年ぐらいでもう全部駄目になつてしまつ。

松田 だから、色の永遠性ということなんですね。どういう色をつけたら、より長持ちするかですね。これはね、我々の仕事の中に流行色の考え方として大きなウェートを占めるわけです。これは商売

をやっていて、非常に効率をあげるための作業としてやるわけですが、これはね、流行色の根源は何かというと、視神經の疲労ですね。赤と緑と、それから黄色と紫の四つの視神經細胞が同じ色の刺激を受けて疲れてくるわけです。そうすると、飽きが生まれるというんですね。

山本 話が盛り上がつたところで時間になりましてたんですが、今日は一般の立場から、あるいは専門家の立場からいろんな意見が具体的に出まして、それでいわゆる物から事を起こしていくといふことについては、これは事を起こす前にもっとこれを一般市民レベルで意識改革、まあ地域ぐるみでもいいと思うんですけどね、それから、何か手近なところで、例えばポリ袋の問題も出ましたし、とにかく都市景観は非常に公共的なものであるから、そういう場所にこの色だつたらいいんじゃないかという一つの具体的な事が起つてくると、連鎖反応して、それがいい一つの状態に変わつていくんじゃないかというふうに考えます。

どうも今日はありがとうございました。

#### ●出席者（発言順）

山本 龍一	(K D A)
尾崎 要	(K D A)
藤田 順伯	(K D A)
大橋 哲夫	(平安建都千二百年記念協会)
真鍋 宗平	(K D A)
柴田 富佐子	(一般)
木村 紀久雄	(K D A)
久谷 政樹	(JAGDA)
松田 豊	(奈良デザイン協会)

## インターナショナル？

# 京都発・1994年

## 室内・建築

お東さんに超高層ビル  
黄金文化 金銀華  
掌の中のマチ 街町  
界隈 団子路地  
東入ル 西入ル  
ストリート豊んで迷路

大倉 どうも大倉でございます。  
いま司会の方からお話をございましたように、私はどちらかというと根なし草といいますか、世界の浮浪児みたいな感じでもって、ボストン、アーネストと渡り歩いて仕事をしてきたような次第です。それで日本に帰ってきたのが約六年ほど前で、まだ京都の風土、それから京都の方々とのお付き合いというのも非常に日々浅そございます。

ひとつ、日本に帰ってきてびっくりしましたのが、あるいくつかの言葉が日常生活、それから新聞に盛んにつかれているということ。それは国際性とかインターナショナルとか、それから世界とかという言葉がもうどつかの集まりに出ると必ず聞こえる。それから新聞でもインターナショナル

倉達也さんをお迎えしております。申し遅れましたが、私、司会の尼川恵一と申します。どうぞよろしくお願い致します。

ご存知のようにボストンも京都と同じ古都でございます。独立戦争発祥の地であり、古い建築物、それから文化を擁した都市でございます。京都もそうでございますが、しかしながらボストンといふのは非常に活気に満ちた都市、東海岸ニューヨークランド界隈でもいろんな情報が入り、いろんな活発な活動があり、新しい建物もどんどん建っている。アメリカ建築界、デザイン界、文化界、そういうものをリードし得るに足りる都市でございます。それで、ボストンで生活していますと、保存という言葉は確かに聞くんですけれども、それと同時にすごく開発が急ピッチに進んでいる。そこで、これは絶対に保存しなくちゃならないという地区もありますが、他のところはもうある意味で乱開発でもいいんじゃないか。もっと極端なことを言えば、私が京都に帰ってきてある友人に

尼川 第六分科会を始めさせていただきます。座長とアドバイザーをご紹介致します。先程スピーチしていただきました地域計画研究所代表取締役社長で、京都大学工学博士の三輪泰司さんでございます。各建築関係の団体の代表をされておりまして同時に京都の経済同友会の会長さんでもございます。またアドバイザーと致しましてハーバード大学をご卒業後、ボストンで設計をされ、またギリシアのアテネで事務所を開かれまして約八年建築のほうに携わっておられ、現在京都で事務所を開設されております、大倉建築設計事務所の大

葉は聞かない。それから世界という言葉も聞かない。皆なんとななく同化しあっている。

それでひとつ、私が四年間住みましたボストンの、京都と同じ面は皆さんご存知なんですが、違う面に限ってちょっとお話をさせていただきたいと思います。

ご存知のようにボストンも京都と同じ古都でございます。独立戦争発祥の地であり、古い建築物、それから文化を擁した都市でございます。京都もそうでございますが、しかしながらボストンといふのは非常に活気に満ちた都市、東海岸ニューヨークランド界隈でもいろんな情報が入り、いろんな活発な活動があり、新しい建物もどんどん建っている。アメリカ建築界、デザイン界、文化界、そういうものをリードし得るに足りる都市でございます。それで、ボストンで生活していますと、保存という言葉は確かに聞くんですけれども、それと同時にすごく開発が急ピッチに進んでいる。そこで、これは絶対に保存しなくちゃならないという地区もありますが、他のところはもうある意味で乱開発でもいいんじゃないか。もっと極端なことを言えば、私が京都に帰ってきてある友人に

うようなことをちらつと、言つたことがあります。京都は優れた古建築と、優れた近代建築が共存し得るような、そんな都市であつていいんじやないか、というのがボストンと比較しての第一印象であります。そしてまた不思議なことを感じたのが、学園都市の構想なんです。これ、三輪先生隣において、こんなこと申し上げるのは大変失礼かもわかりませんが…。

しかしながら、あんな企画をするのか、今もってわからない。この文化都市の京都、学園都市であるところ、そこからわざわざ大事な文化施設をどんどん京都市から出してしまふ。これはもうほんとに京都の地盤沈下に一層拍車をかけるような計画じゃないか。それからもう一つ、歴史的にみて新都市といいますか、ニュータウンの企画というのは、ほとんど成功した例がない。筑波学園都市にしても、今もって暗中模索の状態であり、もつと古い話になれば、ブラジリアのニュータウンですか、それからシャンディガール、インドの。最初は強制的に人がそこに移住させられて、そこで住んで、政府機関の運営をしたり、学問研究をする。だけでも人工的につくられた都市というのは今もつてまだ明りが見えないというようなものであるというのが、現状でございます。

それから先程の分科会のお話でもって、そういう場合出来ました京都の色彩ということなんですが、平安時代の京都の町を想像すると、私は歴史学者じゃございませんけれども、もっと華やかな色がいっぱいあつたんじゃないかな。ベンガラ色があり、グリーンがあり、青があり、それから金箔があり、

神社仏閣はもうそれぞれ華やかな色をまとめて建っていたんじゃないかなと思うんです。

あんまり勝手なことを言うと、こいつはどうも余所から来て勝手なことを言う、というようなことになるかもわかりませんが、ひとつご容赦お願ひしたいなと思います。

三輪 私も京都はものすごくナウいところやと思っているんです。どなたからでも、どんどん、反論も含めてとにかく全員にご発言いただきますので、よろしくお願ひします。

沢野 私は室内のほうに属してます沢野と申します。宮崎木材工業、いわゆる夷川通りの古い家具屋さんで、株式会社宮崎と申します。やはり先程のインターナショナルとか、こういうことに絶えず意識があるわけなんです。

それと先程大倉さんからのお話にありましたように、やっぱり京都というのは、どうもそのタガにはめられるという感じ、建築においても、祇園とか清水あたりの地域保存ですか、ああいう新しい建物を建てるにしても、表の格子をつくれとか、屋根は瓦とかいうようなこと、そういうことのタガというものがあまり過ぎて、もっと大胆に新しいものをつくっていけば、自然とそこに国際性というものが出てくるんじゃないかなと私は思っています。

藤川 私も長年宮崎の沢野さんと同じような、仕事をしておりまして、二、三年前に退社致しまして、自分で細々とインテリアの仕事をやっておるんですけども、確かに、特に京都というのは、以前もあつたんですけど、日本全体が島国であるだけに、





内輪にしか通じない。外国というのは、なんか川ひとつ隔て、山ひとつ隔てたら隣の国だから、言葉も違うかわりに、行動とアクションとか、手を握り合うとか、なんかそういうことで非常に融合すると、本音でほんとに話ができる。ところが日本はなかなか、特に京都は本音と建前の差がひどいと思うんです。だから本当のこと言うて商売失敗したと、嘘のこと言うて成功したと、これが非常に思うように思うんです。

### 京都・青山通り

**志摩村** 例えば大文字ひとつにしても、今だと上に上がらないと見えない、そういうのが京都に生まれた者としてすごく寂しいと思うんですね。

**長戸** まあ、京都の人の性質、人情というのもありますけれども、例えばいま一番私は京都で寂しい思いをするのは、四条商店街の地下道、まあまさにあれは地下道ですね。地下街になつてない。

ですから、我々が属している設計の団体でも、これからそういうことをもっと意識をしていかないかんじやないかということを感じてるわけです。例えばいま丹下健三先生が東京都庁の知事のブレーンの一人になっておられます。で、いろんな意味で東京都の行政に対していくいろいろ提言なさっている。我々もそういうふうな、我々の知識を生かして、行政の中にもっと意見を出せるような立場をつくる、そういうのには、今までどうも我々は中にこもりがちで、外に対する努力をしなかったし、ものを設計することのみにとらわれて、社会性が薄くなかったかと、反省しています。

**木下** 室内やつります木下です。私も所属は先に沢野が言いました宮崎木材工業です。先程のお

**米田匡** 私、室内に関係している米田と申します。私が住んでるのは上賀茂でございまして、去年の十一月でしたかね、地下鉄あがりましてね、ちょうど上賀茂の橋を歩いてたんです。そうすると、関東の女子学生さんでした。「おじさん、京都に青山通りというのがあるそうですね」こう聞いたんですね。待てよ、そんなのないはずだと私思ってたんですね。そしたら雑誌に書いてましたよと、北山通りですね。あのへんのことと言つてたんですけど、実際は中に変わった建物がぱつぱつあるだけで、あくまで点々で商売やってるだけで、非常にさびれていますと、こういったことを私聞きました。さらに、余所から来た方にとにかく京都はどうなんだと言つたら、線香くさくて、お寺が多くて、なんとなしに我々の、日本人のもつてることの故郷みたいなのがあると、こういう表現をするわけですね。ただ反面、京都で非常に面白いところで、古いところに変わった建物がぱこぼこあると、非常になんかユニークさをもつてた都市じゃなかろうかと。こういうような発想をされてる。

**米田健** 日図に所属しております米田です。話が下手ですので、無茶苦茶になると思うんですが。僕もインテリア関係で、たまたまドイツのフランクフルトでハイムテキスタイルであるんですが、それ出品した時に思つたんですが、やっぱしこの個性があればね、どんなところでも勝負できると思うんです。その個性の集まりで一つの大きなものができると思うんです。



話にありました。国際性とかインターナショナルという言葉が書いてあるところは、あれを見ただけでも私もムシズが走るんです。国際性とかいうものは一体なんだというと、そんなものはないという考え方をもつてゐるわけです。自分ということを大切にして、それが全てだと、その成果がいわゆる国際性とかいうことになるんじゃないかというふうな感じ方をしてきたわけです。

京都には昔から非常にいいものがあるわけです。現在も残ってるわけです。ところが振り返ってみたら、まあ建築でいえば代表される古建築とか、数寄屋とかお茶室、これ、実際京都で、そのデザインできる大家がおるかといふといいんですね。不思議に。皆東京に集中しているわけです。

私は、京都というのは行政だけじゃなくて、それ以前のガンがあると思うんです。それは、いわゆるマスコミと、文化人ですね。ある意味で学園都市がきて、そういう人たちが出ていくことは、かえっていいんじゃないかと、先々ね。それぐらいい変な考え方もつてるわけです。

実際、京都が発信できるかと、まあ、今のままだつたら私は絶対できないと思いますね。それよりも、京都をもう一度見つめ直して、京都にあるいいもの、これをいかにうまくやっていくか、ということからスタートしなきゃあいかんのじやないかと。

斎藤　日団に所属してます斎藤と申します。私は、今日は質問という形で来ただんですけども、建築されるうえで、特にどういうデザインがほしいとか、建てるにあたって、現在出てないようなデザイン

がどういうものかいうのを聞きたくて、今日ここに来ただんですけどね。だから京都だけに限らず、僕は日本全体で考えてもらつて、その答えをちょっとお聞きしたかったんですけども。どういうデザインがいいかとか、そういうことをお聞きしたかったんですけどね。

内丸　今の問題で、外野のほうからちよつと教えていただきたいというふうに考へておるんですが。

ちょっと建築とは全然違うんですけれども、作家の遠藤周作さんが言つてたと思うんだけれども、最初キリスト教が日本に入つてきた時に、宣教師たちが日本に一番絶望したのは、キリスト教が全然認められぬというやなくて、その人は信じてくれる。それは確かなんだけれども、どうも信じ方が全然違うというか、彼らが信じるキリスト教は、彼らの土着的な宗教に根づいたキリスト教だったということで、そこらへんのところに宣教師が非常に絶望したというふうなことを遠藤周作さんが書いていたんですねけれども、何か新しさという時に、特に京都の新しさ、日本の新しさという時に、そういう新しいものでも、常に自分らのなかに根づかせてさらなる新しさをつくっていく原動力みたいなものが、日本の文化にはある。特に京都においてはそうではないかという気がするんです。

さらに京都の場合には情報はさほど考えすぎるわけではなしに、新しいものをつかんだ時に、何かそれを自ずから新しさの中の自分にほんとに適するような新しさを出して生かせるようなポテンシャルティが京都には特にあるんじゃないかな。関

西には特にあるんじゃないかということです。新しいものをつくる体质、それを否定する体质、二つあって、それが絡み合いながら動いていくのが京都なんじゃないかという気がします。

### ライオンの胴掛け

正木 グラスアートやつてる正木です。もともとはステンドグラスから始めたんですけども、今ではガラス棒とか、それから透明な建築用に使う板ガラスを使って、グラスアート的にやつてます。

いま皆さんのお話聞いてる中で、国際性とか、京都という話がしょっちゅう出てくるんですけども、なんとなく京都にムチャクチャとらわれ過ぎてんのちゃうかなというのが私の気持ちなんですね。国際性、国際性と言われるのは日本だけやということ、大倉先生もおっしゃったんですけれども、一つは京都人であること、京都の特性とか、京都の特色というのを喋るとか、自覚するということのメリットと、同時にデメリットがひつついてくるというような気がするんですね。京都の町並みも好きだし、雰囲気も好きだし、京都人のもつてる感性も皆好きなんです。だけど、なんとか京都、京都と振り回すことはあんまり好きじゃないという、そこらへんです。

太田 太田でございます。

私もたびたび海外のほうへ行つてますので、そちらのほうの建築のお話を伺いできるかしらんと思って、インテリア関係、室内装飾とか、そういうのがちょっとお聞きしたかったんで、こちらを選ばせていただいたんでございます。

井口 室内の井口でございます。僕は室内設計には所属しているんですけども、どちらかというと自分で家具とかそういうものをこしらえる者なんですが、ちょっと今お話を聞かせていただきていて、はてな、疑問を一つ一つ解くことによつて世界は見えてくるというふうなテーマなんですよ。よけいわからんことが出てきまして(笑)、まったく頭の中が混乱してるんですけども、伝統とはなんやろなと思うんですね。

江畠 一般で参加させていただきまして、江畠と言います。ID関係の仕事をやってるんですけど、今日は建築とインテリアに關してちょっと教えていただきたいんですけども。新しいとこへいま家を建てとるんですけど、今までの日本建築ですと、インテリアっていうのはもう素材が自然に決めてくれたと思うんです。最近は壁紙から天井材から全部選ばんならんということで、工夫しているわけです。それで容器物はなんとかできても、今度はそこへ入る家具ですね。家具をもう全部新調すればインテリア・コーディネーションうまくいくんかもしぬませんけど、今使ってる家具をなんとか生かしてコーディネーションをやりたいと。そうなりますと、つい五年ほど前に大枚はたいて飾り棚を買ったんですけども、それも使いたいということになりますと、ダイニング・リビングというようなとこへ置きますと、様式が恐ろしく違うんですね。以前買ったやつの様式に合うものを探しているんですけども、ないんですね。デザイナーの方はどんどん自分の思う新しいデザインを発表される。しかし、道具類はこれ一つ買えば何世代

も使えるわけですね。昔のほんま物の木を使ったものは何十年も使えるということで、ころころ、ころころデザインを変えられますと、その都度全部買い替えなあかんわけです。感性、感性言いながら、あまり気にせずに様式をごっちゃにした生活をそろそろ反省してですね、このへんで様式を確立してもいいんじゃないかなというような気がするんです。皆さんどう思われてるでしょうか。

**藤本** 一応室内に所属しております藤本です。僕自身が今住んでるところが古い新町室町のど真中なんです。祇園祭りのとこなんですね。今までタペストリーとかいろんなものが飾ってあつたんですね、使えんようになつたんですわ。それで「鶴」のタペストリーを相当お金かけて、新調したんですね。例えば祇園祭りの胴掛けいうんですけど、去年つくったのがライオン、ものすごく突飛なんですね。

祇園祭りに、これ山口華揚先生の原画なんですがね、ライオン。僕あれつくった時にびっくりしたんですね。同じ町内におりながら、ようこんなにしたなと思うて。ただ町内の古い長老なんとかいろんな役員さんがたくさんおられますんでね、お聞きしますとね、どないしてもこれがしたかった。で、昔からある伝統を破つて、古い模様じゃなしに、ライオンで、みんなもん、とにかく皆さんびっくりしやはると思いますわ。それはたまたま町内が、市とか財政とかそういうこと関係なしに、一遍やつてみようやないかと、その発想が面白いものを生んだんです。

**甲斐** 一般参加で、何もわかりませんが、ただ、室内と建築のこと興味があつて、いろいろなお



話を聞いて、自分を高めていきたいと思つております。

**小林** 最後になつてしまひましたけど、私、京都デザインセンターと申しまして、ここをやってます柴田のところで働いています。で、これは私どもの柴田のコンセプトでもあるんですけども、毒を制せぬして薬は得られない、というような、そういうようななところからお話をあつたようなんですが、先日、金沢と広島にあるちよつとコンサルタント的ことで行つたことがありまして、金沢で僕がものすごく驚いたのは、あそこも小京都と呼ばれている古い町なんですけども、街中が大革新されてるんです。メインストリートは石畳ですね。で、その格好よさたるや、まあヨーロッパの町にひけをとらない。そのまま横に兼六公園、それから兼六公園に結ばれていく小さな路地が、水路みたいな、京都でいうと高瀬川みたいなところが小さく流れまして、で、表通りに出た途端に大変大きなデパートがどかんと突然できあがつている。そういう新旧というものがダイナミックにうまくつくられてる。これは金沢というスケールがそれをさせているというのがすごくあるといふのが、調べていくとだいたいわかつてきただんです。それともう一つ、広島に行きましたが驚いたのは、これ四十年ですかね、戦後復興で、四十年でここまでばらしく街ができるんだという一つの見本だと僕は思いました。

ところでいま京都で、なんで生きてると思いますか。伝統産業とか、なんか今僕らが京都で売ろうというのは、観光ですかね、寺院とか、あん

なもんで未来が生きられるとは思えない。これだけ未来があるわけがないということを皆で考えて、新しい都市のなんていうんですかね。生きていくための栄養をもう一遍つくり直さないかん、と思います。もうひとつはそこに住んでる市民そのものの性能を上げなきゃいけない。市民の性能が上がんないと、もうダメです。これはね、僕はもう全市民にどっかで言わないとダメだと思うんですよ。

## 中規模都市の新美学

藤川 我々はインテリアのほうなんですけども、よく注文主が、建築設計屋さんなんか非常にいいやないか、人の金で自分の作品をつくらしているやないかと。自分は一切金使うてないやないか。で、後世に残つとる。で、確かにそれだけの頭脳と何とは出しますけれども、注文主は何億というお金を使つたと。そういう点で非常にいい商売だなという具合に羨ましがられている面があるんじやないかと思うんですけども。

で、その割になんか、設計なさってる先生方はあまりいい目をなさつてないようちよつと思うんですけどね。

小林 大倉先生、なぜ京都にいらっしゃるんですか？

大倉 これはまったく個人的な理由なんですが、僕ボストンに長く住んでましてね。ニューヨークほど大都市ではない、東京ほど大都市ではない、まあ中規模都市なんです。都市の端から端まで、まあ場合によって歩こうと思えば歩ける町である

ということ。それから古いものと新しいものが非常に互いに刺激し合って存続しているという。ですから、ボストン、アテネから見直した時に、非常に魅力を感じたことが一つで、自分が仕事をしている時に町の端っこが見える都市で生きたいなど、仕事をしたいなというようなつもりでもって、どちらかというと京都を選んだというほうが正解だと思うんですけれども。  
それから祇園祭りのタペストリーでもつてライオンを町衆の老人たちがあえてつくっちゃつたというお話を。本来これ町衆が京都で昔からもつてゐる性格、だつたんじやないかなという氣がするんですね。タペストリー、今でこそ古いものを大事にぶら下げているけれども、あの当時というのはもう日本に全然ないようなものが絢爛豪華に飾られていたという、それを先程新しくライオンをつくったという話を伺つて、あ、やっぱり町衆の心意気というのはまだ脈々と生きているんじゃないかなというような感じがしたんです。

三輪 やっぱりね、町衆がやつて、頑張つてはつて、室町あたりがタペストリーとかやるけど、大衆はまだ超高層ビルつくるほどの錢はないんですね。僕はこれ日本中から金集めて、あるいは世界中から金集めてつくつたらええやないかと。現にえらそうに言うとるけど、お寺なんてあれ京都の人間だけでつくつたんちがうでえと。あれ日本中から金集めてつくつたらええやないかと。現京都は場所貸してただけで、皆外からやつてきたんやないかと。今もうちょっと寸法広げて、世界中の金でつくつたらどうやと。

大倉 建築士会から、ある出版案内がきたんです。

それで何かなと思ってパラツとカタログあけて見たら、民活ですね、日本の。民活プロジェクトの

本を紹介する案内。それを見ましたらね、民活のプロジェクトが全部各都道府県の分が列記してあるんです。東京はいっぱいあるんです。千葉もい

っぱいあるし、横浜もいっぱいある。神戸もいっぱいあるし、大阪も、大阪城界隈のがざーといろんなプロジェクト、皆これ民活です。京都の欄を見ると、二項目しかない。一つはあそこに掲げてある建都千二百年、それが一つ。もう一つはなんだか忘れましたけど。

小林 二条駅周辺。  
三輪 役所は頭だけ使うたらええやないかい。あるいは、時にはね、やっぱり百五十万人もおるの

で、一つ一つやつたら、たいしたことだけへんけれど、役所であつたらできると。先程申した見本市会館なんかね、あれは京都府が事業税に二%上乗せしたんやね。それをプールする。だから、またたくあればこの金だけで、まあ稻盛さんが寄付しやはりましたけど、つくって、国の補助金全然貰うてない。一、三%ぐらいやつたら、期限五年間とか言うたら出してくれるわけですね。そうやって束にするという方法が一つ。  
それと例えば、ものすごい壮大なレストランシアターみたいなんとかね。いつまでも祇園町ばつかりやないやないかと。外国人の方来て、いつも困るんですね。また祇園町かと。しかもあそこではですね、三十人ぐらい来たらもう入れへんわけですよね。あんなんばかりではあかんやない

かと思うんです。

米田 今度できるシンフォニーホールもね、やつぱりこれはええ、一番ええというぐらいいのものを

つくってほしいですね。なんか文化、文化言うて京都は全部素通りしていくでしょう。

小林 ああいうのんこそ、まあここに先生おられますけど、ひょっとしたらアフリカのなんか全然知らんような建築家に頼んでね、で、何故かといふと話題性だけなんですね。もうこれは世界中から見に来てしまうという、なんか驚異的なものがそこにあるんだということで。それは、だから他の目的であつてもいいんです。

尼川 どうもありがとうございました。座長に三輪先生をお迎えし、またアドバイザーに大倉先生をお迎えして、皆様方からいろいろなご意見を承りました。これを二ヶ月ぐらい後に皆さん方にまとめて配付できると思います。本日はほんとにありがとうございました。

#### ●出席者（発言順）

尼川恵一（室内） 齋藤勝哉（日図）

大倉達也（建築家） 内丸恵一（建築）

三輪泰司（建築） 正木友梨（ICC）

沢野周二（室内） 太田玉重（ICC）

藤川一光（室内） 井口明夫（室内）

志摩村ひろみ（KDA） 江畠武美（一般）

長戸幸雄（建築） 藤本進（室内）

米田匡宏（室内） 小林郁央（一般）

米田健一（日図） 甲斐竹子（一般）

木下長生（室内）

松田 緑

（建築）

# KCC

## 国際性とはなにか

言葉はネックか

竹村 皆さん、当会にご出席をたまわりまして誠にありがとうございます。“国際性について”ということなんですが、このチームのリーダーを務めます宮井欣二氏をご紹介させていただきます。宮井氏は三十九年から五十七年の約十八年間、主にベルギーのブラッセルを中心としましてヨーロッパ諸国で仕事され、海外経験が豊かでございます。

フリートーキングという形での国際性についてのテーマを推進していくたいと思いますが、それでまずははじめに宮井さんからお願ひします。

宮井 至りませんが、ご指名でございますので受けます。

悲しい	哀しい	哭く	日本語
楽しい	嬉しい	咲う	
表現肌理細やか	日本人	氣持艶艶	
感性蕩蕩			

して私が日本の国際人であるなどと思いついたかないようにお願いしたいと思います。それから日本人ばかりで“国際性”をあんまり論じてもどうなるかなという気が実は先程からしておりまして、どなたかおっしゃってられましたね。国際化ということが非常に新聞・雑誌等で取り上げられているわけなんですが、なぜ今頃、日本だけで、あまり外国では国際性がどうのこうのということを言わないですね。

森 クラフトセンターに勤めております森と申します。今、社長がおっしゃったように、まず国際性とは何かと、我々日本人ですので、特に自国のことをよく知らないかんということがまず一つだと思つんですけども、特にクラフトセンターで

今随分外国の方をお迎えして工芸品を販売しているわけですが、かつては欧米の方が非常に多かつたんです。今は隣国であります韓国とか東南アジアですね、非常に目立つて多くなってきていい。それで今まで英語が主だったのが、今はイングリッシュとか、非常に聞き慣れんような言葉が耳に入ります。外人と接すると言つても、ずいぶん肌合いが違つて来ているわけです。

藤原 古本屋やつております。御所の前で。藤原と申します。よろしく。

その国際性のことなんですが、結局僕なんかが感じるところは、日本人は外国人と喋るの嫌がるでしょう。今朝も僕とこにニューヨークから、銀行マンでしたけど来て、古い本が欲しいというんで、朝のもう十分ほどの間に決めて買つて帰つたんですけどね。彼なんかと喋つてるとね、まだ日本語、日本のことわざを言つてるとね、まだ日本語で、朝のもう十分ほどの間に決めて買つたんですけどね。だから困るんだと言つてました。

浅田 国際性という言葉を言われておるんですけども、確かに国際性という言葉を言うといふことは日本人といふのはどうも外国人がどない考えてるやろかないうことがいつも気になつてしまふがないという国民性なんですね。ヨーロッパに基準を合わせれば確かに我々やつてることはまるつきり反対のことであつたりするわけですし、私たちの小さい時はアメリカ人がこないしているからという、単なるそれだけで、それが非常にレベルの高いことをやつてるとかいうふうに言われたりしてましたからね。

藤原 結局アメリカが今怒っている、ヨーロッパ



が日本に対する怒りはお返しがないからでしょう。取りっぱなし、試供品でもなんでも、お金でも、ねえ。ニュースでも。

**金原** 日図の金原と申します。仕事の半分が墨で書く事でしてね。国際性に関わると言えば、前にオーストラリアから一人来た人に、墨を教えてくれということでお話ししたんですけども、言葉の壁があつてうまいこといかなかつたんです。そういう墨屋の、自分も教室もつておりますので、これから初步的なことですが、そういった国際性のあることに関わっていきたいと思つりますので、そのことを今日は勉強したいと思ってきました。

**久保内** 画材店を大阪と京都で経営しております。他に不動産関係の仕事もしております。久保内と申します。近頃、京都で画材店を開くにあたりまして、仕入れで外国に行くことがあります。他には遊びでヨーロッパだとか、いろいろ行ったことがあるんですけども、普段は自分自身充分国際人間であると、生活が朝から晩まで非常に、食事にしても、お行儀にしても国際的なんですね。だけど外国に出て初めて自分を、日本人なんだなあということが痛いほど身にしみるんです。

**簾持** 私自身も今やはり英語を勉強して、あるいはどんどん外に対してものを言うことは大切だと思ふんですけれども、その前にまず充分に京都を知り、日本を知りということだと思いますので、発言させてもらうんですけど、そういう意味で我が家に帰つて寝る前には必ずいつたん着物を着ます。たとえ十分でも着ます。着物を着ないとなんかほつとしない、いいアイディアが出ないということ

なんですね。そういう習慣がありまして、私もつと日本人、どこへでも着物きていいと思うし、最近作務衣がファッショニで、大いにそういう着物でもない、洋服でもないというふうな中間的なものでもいいと思うんですね。そういうものが出てきて、もっともっと衣食住を含めて、また五感全て含めて、あるいは第六感も含めまして、そういった高品質、高デザインのもの、絶えず我々クラフトマンとして追求していくば、ちつとも世界中どこへ行ってもなんら恐れることもないと思うんです。

**浅岡** 京都設計家協会の浅岡でございます。私は国際間のいろんなぎくしゃくした問題はやはり文化化、それから宗教ですね、言葉の問題、そういうものが一番やっぱりネックじゃないかと考えております。

**坂本** 国際性というのは、日本の日本人といいますか、日本のアイデンティティをまずもつといふことと、それからやはり許し合える気持ちといふですか。あるとこでお話聞きますと、ホームステイに学生が来まして、そこでおじいちゃんと一緒に食事もするのが一番いいんだと、もちろん一緒に和氣あいあいとやつております。ずっとはじめはいろんなビフテキなんか食べておりまして、だんだん日本の食事も、ということで、メザシを出した。そうするとどうしても頭だけ残しておくといふようなことになつて、やはり日本人はこれ頭から食べるんですよ。僕も非常にいいことだと思います。そしたら、嫌々食べました。嫌々食べてですね、やおらその子が冷蔵庫開けて卵を持って

きましてね、うちの国では卵をこのまま食べるんだ。これ人から聞いた話なんです。そしたらおじいちゃんはそれをむしゃくしゃと食べたというんです。それから非常に和氣あいあいとなっていましたという、なんていいますか、相手の慣習を許し合えるという気持ち、これは非常に国際化では大事なことじゃないかと思います。

クラフトのほうでも何かそういう今の歴史から変わってきたりすることがあれば、また教えていただきたいと思ったので。

筆持 木工なんかで木の椀をつくりますね。あの場合、手に收まる寸法で、だいたい横が二で縦が一だとかいうふうな、そういったことはございますよ。それが一番持ちやすい、使いやすいということです。

### 宝船は左向き

田中 京都クラフトセンターに昨年入れていただきました、クラフトセンターは、京都の感性を追求したクラフトを勉強する場だということで、私も非常にそのことに感銘しました。実は私ところは意匠紙製品、いわゆる京都的な感性をできるだけ盛り込んでいっていますか、そういうものを生かした紙製品をつくっていきたいという、そういうふうな形の商売をしたります。いわゆる今の国際性ということなんですが、実は多分に京都だけの商売、日本だけの商いじゃなしに、できることならそれを海外へ、この美しい商品を出していきたいと、こんなふうな形からいわゆる海外で理解される商品、デザインのつくり方というふ



うな形のことを常々悩んでおるんでして、今日、国際性とは何かということで、何かここで一つ勉強できるんじゃないかというような形でこれに参加させていただいたわけです。

遠藤 私は金属装飾品をやっております遠藤と申します。国際化といいますけれども、私のほうの工房においても外人の方が、よく来ております。言葉はあまり通じないんですけども、大学の教授だとか、あるいは向こうの工房の人だとかが時折り、半年、あるいは一年というふうに来いらっしゃる。そこで一番私が感ずることは、こういう人が来るけれども、あんたんとこ、連れていくからなど人に連絡しますと、いや、わしはそんな一文にもならんもんいやと、こうですわな。

あんたんとこ、一人でやりなさいよ、わしや、そんなんもう邪魔くそうてかなわんわ。そのくせ店に行ったら一所懸命なって売ってるわけですよね。押しつけてるわけですよ。やってることと言つてることが全然違う。とにかく体裁のいいことを言つてるけども、全部物を売るためだと。それが今問題になってるんじゃないかと考えますね。

だから、国際的な関心のある方、ほんとに交流し、日本のそういう将来を考えていく人が皆集まつてやりやあいいんだけども、そうでない部分の人気が集まってやつても意味がないから、やはりしつかりと頑張らないかんということです。

藤原 そういうことです。

竹村 よくわかるんですけど。私ところは袱紗、風呂敷を主にやってます宮井株式会社の企画室を担当しております竹村と申します。いろいろなお話



面白く聞かせていただいているんですが、袱紗というものは今現在では日本人でもあまり、京阪神は使いますが、それ以外はあまり使わないですね。ところが海外に明治三十年代は相当輸出品としてどんどん送ったわけです。それによって明治時代の外貨獲得をして、そばっかしやないですけども、向こうでは袱紗とは言わずに、タペストリーとかテーブルセンターに使ったわけですね。それが今、アメリカのいろんな美術館に保管されておりまして、それを今のアメリカの人が見て、非常にきれいだと思うんですね。でもどう使ったかわからないんです。それをうちの方に尋ねてみたところ、書面でもって連絡をしてきたりしたるわけです。使い方はこういう精神構造で、こういうふうに贈答として、日本人の贈りものとしての習慣があるて、こういう贈り方をする。その精神構造は結界思想といいまして、俗なもんと聖なるもんと区別をする。そのためこれをかけるんだけどいうね。風呂敷で包むんだとかいうふうに、けじめをビジュアル化するというのか、視覚化していくんだと説明するとわかるんですね。ところがその袱紗に書いてある模様が何を意味しているのかわかりにくい。そのへんが非常に日本を神秘的といいますか、不思議な国だということにしているようです。宝船の図案を見ましても、進行方向が向かって左でないとあかんと。なぜなら、これは出でていつたら困るんですね、入ってくる宝じゃないと具合が悪い。このようにデザインに対する一つの様式というのが日本ではほぼ決まっておりまして、模様を見ただけでどうすることを気持ちにも

つて贈ってくれたんだよということが相手に伝わる仕掛けいうのがあるんだと、こういうことが向こうに伝われば、日本人は物語性がある贈答ゲームをやっとるということがようやく理解できる。国際性というのは難しいなと思うのは、日本語では非常にボキャブラリーが豊富ですね。優雅といふのと、上品というのと、どういうふうになるんか、そのへんの伝え方は通訳をする人は非常に苦労すると言いますね。ですから、もつとダイレクトに表現をしてあげるという努力をこれからやつていかないと。そういう意味で国際性というものをとらまえていったらどうだと私は思います。

宮井 まだ時間はたっぷりあるんですけども、先程、私は“国際化”ということと“国際性”ということをちょっと混同したような発言をしまして、日本が、国際化、国際化と言っているのは、だいたい向こうのほうの制度とか、こういうことの取り入れですね。そういうことをやっているということから、欧米が基準であるんじゃないかということをちょっと申したんですけど、国際性ということは、なにも欧米だけの話じゃないんでありますから、東南アジアでも中近東でも、皆外国なんですから、国と国とのコミュニケーションをして、これは東南アジアでも中近東でも、皆外国人ですけども、我々のもつと身近なアジアの人たちとの場合をちょっと考えてみたらどうかと思うんですね。

藤原 だから、今会長が言われました、いわゆる韓国、北朝鮮、それから東南アジア各国を日本が差別すると、ものすごく怒ってますわな。全然差

別してるわけやないんですけどね。

藤原　喋るほうを、これから日本人は勉強していかないかんということですな。

## 感性の国際性

浅田　ただ、確かにそうなんですけども、ひとつ音楽で言えば、音楽そのものが喋らなくとも通じ合うものがある。クラフトにしろ、デザインにしろ、そういう造形的な一般芸術関係全て同じようなことが言えるんじゃないかと思うんですけど。

森　茶寮で本をちょっと読んでもしたらね、アンケートが載ってましてね、日本人が行きたい国の国民の方は日本人嫌いやと。日本に好意的なほうは日本人の方が好きでない。明らかに逆に出ていて、それに対して日本人はどうですかね、交流の仕方ということ自体が相当おかしいんじゃないかなというような。

浅田　先程の話にちょっと戻しますけどね、音楽は理屈なしに共通性があると。先程、竹村さんがおっしゃった柄なんかの場合、いちいち説明しなければ理解してもらえないのかと。そうなつてくるとちょっと面倒だなと思うんですが、我々も外国のものをそんなにいちいち理解しながら、これはいいとか、悪いとか、ほしいとか言わずに受け入れている部分が多いですね。間違った受け入れ方もしていると思うんですけどね。でも、やっぱし本来そういうもんとちがうかなというところもあるんですよ。

田中　例えば府のほうも海外へ駐在所を設けたり、市のほうもなんか一所懸命やつてはりますけども、

これにしたって、ほなそんなに真剣になってやろうとするのなら、そんな課があるのかと。貿易局いうようなもんでもあるのかと思ったら、そんなもんじゃないですね。貿易課もあらへんねんね。商業貿易係ですね。これではそらものにならんですな。国際化という中にもやっぱりビジネスのこともありますし、いわゆる京都の国際化ということでは。

宮井　それだけそういうことに対応できるかとということですね。

簾持　私思うんですが、先程の話聞きますと、建都千百年当時は確かにそういう疏水ができたり、あるいは平安神宮もできたりと、すばらしいそういうものができたりして、その頃は京都市のいわゆる日本におけるGNP、これが確か十六～十七%だったというんですね。ところが今は一%なんですね。そんなところに、私、今おっしゃつているような、バーーと先に出てくるけれども、一向に現実が伴わないという、このへんの経済的な問題がちょっとあるような気がするんですね。

田中　宮井さんにちょっとお尋ねしたいんですけども。ヨーロッパの感性というのは非常になんか日本の感性というんですか、京都の感性と近いんだという話を……。

宮井　そういうことが言える部分があると思います。といいますのは、やはりいいものは和のもんであれ、洋のもんであれ、共通して、いいものはいいということですね。京都の人ちゅうのは、いいものを非常によく見てますわね。着物でもいいものでありますし、それらは文化的遺産という問題



がありますわね。京都は多いですね。ヨーロッパもやっぱりそれが言えると思うんですね。随分やはりいいものが遺っておりますしね。だから、そういう意味で今おっしゃったようにちょっと感性が似ているんじゃないかと、そういう面からは言えると思います。

**田中** だから、あなた方が非常にいと、これは自分とこの商売の話になってくるんですけども、あなた方が日本の国内でよく売つてられて、とてもよく売れるという商品であるならば、ともかくヨーロッパでもよく売れますと、考えていただきてもよろしいと思うんですね。私ら、むしろ今までのアメリカとの取引では、単純に言えば、日本で売れないようなデザインのものが向こうで売れるというふうな経験をしばしばさせられたことがあるんですが、ヨーロッパ人は非常に日本人、京都のそういう感覚に近いんです。

**宮井** それは言えると思いますけどね。これはものにもりますけども、やはり技術的なものとか、そういうものはわざわざ向こうのためにこうしろとか、向こうの人はこうだからこうしないかんとか、そういうようなことはないんじゃないかなと思いますね。やはり本当にいいものをつくって、持っていくことが基本ではないかと思うんですね。

時に、まあ言つたら嫁入り道具の呉服を買うとか、和装小物を買うとか、もつと伝統工芸のいろんな漆のこういうね、塗り物みたいなものを買いたいとかね、そういうお客様がものすごく多いですね。そういう意味でいろんな産業が皆恩恵を被るということね。百貨店なんかでも聞いてみると、観光シーズンとシーズンオフで、一般のお土産屋さん以外の普通のお店も売上に変化がある。そんなこともよく聞いてるわけなんですけども。

**遠藤** 実は僕ら、そこが知りたいわけです。結局このままでいって、京都について語られていくことの目的が果たせるのかどうかということですね。だから国際性云々の問題にして、やはり外国のいいデザインとか、やっぱりいい文化とかも吸収したり、我々の文化というものが果して世界にどう受け入れられているのかということを考えることが僕はやっぱり国際性の基本だと思うんですね。

**宮井** 今日は、本題の話からちょっと京都論に入りすぎた感じがありますけれども、これは皆さん京都をいかに熱心に思っておられるかということやと思います。時間もまいりましたので、これでお聞きにしたいと思います。

#### ●出席者(発言順)

竹村昭彦	(KCC)	久保内信子	(一般)
宮井欣二	(KCC)	簾持 宏	(KCC)
森 勝久	(KCC)	浅岡幹夫	(建築)
藤原 昭	(KCC)	坂本克也	(建築)
浅田篤志	(KCC)	田中良一	(KCC)
金原保則	(日 国)	遠藤泰一	(ICC)
土井妙子	(KCC)		

## グラフィック・マルチチャンネル

# JAGDA グラフィック マルチパワー

アイテムはグラフィック  
エディトリアル  
ファッショニ D  
デザイン・スピリット  
パッケージ  
ポスター  
都市

と思います。

**田積** 最近僕感じてることでいうと、今日のテーマの、“インターナショナル京都”、“京都の着だおれ”、まあこれもあんまり関係あるかどうかわかりませんけど、伝青の“ものづくりから、ものひろめへ”、それから“国際、京都、建都千二百年”などは、これも全体的な京都としての問題点やと思います。それから“景観都市の色彩を考える”、それから室内・建築“京都発・一九九四年”といふ、京都は世界に発信できるだろうかと、それから“国際性とは”、それから“一条城に天守閣つくろう”やないかなって、こんなことが全部出てきてるんですけども、JAGDAっていうのは、なんか僕は最近考えるうえにおいて、この一から九分科会の中の要素全部をもっているのがグラフィック・デザインじゃないだろうか、そういう仕事の柄でないだろうかと思うんです。

たとえば昔ですと、家の横にこれぐらいの形で、何々通りとか、何丁目とか、非常にクラシックな形でこんなもんが出てたんですけど、最近はまあ国際都市とかいうことで、当然ローマ字も出なくちゃいけない。その場合の形の処理の仕方だと、また京都のもつていいる色彩てなんやろなというよう、京都のテーク色でなんやろなとか、いうような問題も、ただそのジャンルの中だけで語るんじゃないで、全てに参加していかないかい。また参加の遅れていたんが、またグラフィックであるというのが今日の現状でありますんで、大いにそのへんを出してもらって、進行していくたいな

と思います。

**嶋** いま田積さんがおっしゃってるような状態に僕は近づいているように思うんです。そうなってると思ふんです。現にうちの事務所で今受けてますが、宝塚市の陸橋がありまして、その下の側壁のデザインと、その傍にある警官の詰所と、その奥にある公園のモニュメントをせえと言われたわけですね。行政がグラフィック・デザイナーのほうにそういうことを頼んでくるということは、逆に言うと、グラフィック・デザイナーでしかそういうことはできないと思うんですね。つまり都市総合の美観というふうに、全体像としてとらえるとしたらそれはグラフィック・デザイナーの仕事だと思いますんで、そうなると、グラフィック・デザイナーっていうのは、ゼネラリスト的な立場になるべきだと思うんです。

**大野** 私、大野と申しますが、ちょっと私の個人的な意見なんですが、ちょっと私の個人的な意見なんですが、いわゆる今までのグラフィック・デザイナーの仕事というものは平面のデザインのことですね。友達に建築デザイナーがいますが、例えば彼らに言わせたら、柱を建てて、そこに人が何人か住むですから、一本こけると人命までのすぐ損ねてしまう。そのデザインのレベルで生命までかかっているみたいなことがあってね、そのへんで建築の場合、機能性みたいなもんを非常に大事にされていると。僕らはどっちかというと、飾りたてたり、なんかデザインしなあかんねんやみたいな形でね、ケイを引いたり、例えば色をさしたりとか、なんかそういうことがものすごく習慣になつてたんです。これから



は街とかね、外へ意識が出ていく。さつき田積さんがおっしゃってた看板にしても、そういう類のものまで機能性を主体にしてものを考えていただね、もっと広い意味での力になれるんちがうかな、そういうふうなこと感じました。

**橋本** 橋本と申しますけど。僕はどっちかいうたらコピーが中心なんですけどね。グラフィックという難しい、僕まだ勉強不足でもうひとつわからぬないですけれど、広告としてちょっと話させてほしいんですけども、以前ブームになった時からずっと僕らは関西中心で仕事してるわけなんですが、やはりなんにしろ、東京でやればカッコええ。向こう側ふうの、僕らでしたらコピーを書いたりね、向こうで人気を集めたようなビジュアルをもつていけばスポンサーが喜んだという、そういう時代がついこの間まであったと思うんですね。

というのは、先日北海道の電通の人で、その人もコピーライターなんですが、彼の「東京発十三の忘れもの」という本を読んだ時につくづく思つたんですけど、もうやっぱり昔は地方の時代と言われましたけど、これからはますます地域密着の時代だと思うんです。で、なんでも東京がカッコええということ自体がおかしい。それを読んでいて、僕らも言葉足らずかもわかんなないですけど、広告なんか特にそこらへんの、いま皆が暮らしているその横とか後ろにね、隠れてるものを探してくる。これなんですよ。例えば商品でしたら、商品なり企業というのを結びつけていったら、こういう一つのグラフィックのチカラというのが見出せるんちがうかなと。

恩地 実は京都デザイン協会の中で、昨年の十月から研究業務でいうのを開始したわけです。何をやるかというと、テーマは『京都、都市、美観研究』。これは最終、年次的に必ずマスター・プランを世の中に出していく。これはもう絶対公約したから出す。というのも、これは多分自分自身に対してもんですけど、これはグラフィック・デザイナーであれ、インテリア・デザイナーであれ、なんでもこう無力なんであろうかと、非常に腹がたつて。僕は、もう少し先の話になりますけど、ここにある『絵葉書的な京都よ、さよなら』というコピーに引っかけまして、で、これは非常によくわかる。よくわかりながら、あえて絵葉書的で何が悪いかというのを僕は言ってやろうと思って、どこが悪いかというのを証明してみようと、それができたら楽しかろうなと思ってます。

田積 今の段階で、市民権を得るという項目が出たというのも、この十一団体に、JAGDAといふグラフィック団体が加盟したということも、まだ我々に市民権が得られてないという現実が附てのことです。たとえばグラフィック・デザインを親父だけが職業にしてるんじゃなくて、家族も子供も皆そんな感覚充分もってやってる、トイレはピンクがいいなとか、…なのに、なかなかある意味での職業としての市民権が得にくいというようなところがあった。なにしろグラフィック・デザイナーは非常に器用な職種で、なんだってできちゃうんですから、じつと地下にもぐつても、きっとお呼びがくる時が必ず来るだろうと。



在どういうふうな形になってるかという、まあ説明があつたんですけど、私の感じてるのは、純粹芸術の、例えば絵とか彫刻と違う点は、グラフィック・デザインの場合、依頼者があると思うんです。いわゆる親方があつて、発注して、それに発注者の気に入るようなものをつくるという、そういう一面は、これはグラフィック・デザイナーがどうしても抜き差しきれないもんだと思うんです。文化性みたいなもんが、いわゆる経済性とか、そういうもので圧し潰されている現状、非常に歎惜しいんです。

### 京都デザイン考

**奥田 実** 実は、私もKDAとそれからJAGDAと両方書いてるわけなんですが、もうKDAはいわゆる発足当時に、まあ言うたら発起人みたいな形で出発したわけなんですねけれども、その時点で皆さんおっしゃってたような、その職能を越えた時点でのあらゆるジャンルの、いわゆる一人間としての、デザイナーとしての感覚を伸ばして、それで新しい波を京都から起こして全国に波及さそうというようなことで出発したんですね。だから二年目に、まあ私が主張して、もうジャンルの壁を破ろうとしたんです。

それで、この間東京でデザインと紙飛行機をドッキングしたというような展覧会をやつたわけですが、その時に私びっくりしましたのは、国際的評価を得てる紙飛行機の大家が二人も見にきてくれたことなんですね。こういう紙飛行機の作り方があるんかというようなことで、こっちも感激

したわけですね。向こうも非常に感激してね。だからやつぱりね、そういうジャンルを越えたところでの運動を、啓蒙していくというのも一つの方策やないかと思うんですけどね。

**小林千** 今コピーを見せてもらっているんですけども、退屈させない京都について、語り合いたいって、すごくいいなと思うんですけど、現実にグラフィック・デザインの仕事やってまして、それで京都の街を歩きますと、京都にはデザイナーいないのと違うかなと思えるぐらい、なんか取り残されているというか、そういう部分がものすごいあると思うんですね。

忙しなったっていうふうに言うてもらう事があるんですけど、確かにすごい忙しなったんですね。昔と比べたら、一日かかってしっかり描いてた仕事が、今やつたらもうそれが一日に何枚もできると、それで結局忙しなって、仕事がすごく早くできるようになったから、その分余裕ができたかというと、全然ないんですね。そのへんでほんとはその余裕というか、その何か余ったものというの、どこへ行つてしまふたんかというふうに思うんですけど。それと、味のあるデザインですか、そういうのはそれぞれもって、まあ隠しもつてるというか、あるとは思うんですけどね。

**今村** 私は今までにテキスタイル・デザインと、ullokingしたというような展覧会をやつたわけですが、その時に私びっくりしましたのは、国際的評価を得てる紙飛行機の大家が二人も見にきました。こういう紙飛行機の作り方がデザインしたいなというのと、すごくギャップが出てくる場合があるんですね。それで、材料

とか値段とかいろいろあるんですけども、それと闘ってデザインをやつしていくのももう一つの方に向なんですかけれども、もう一つすごく感じるのは、最近はラッピングコーナーってありますでしょう。

それをまた別にして売ってるわけですね。まあそれはすごいいいことだなと思うんですね。デザイ

ンやってない人がね、もうすごくセンスがよくなってきたと思うんです。全部仕上がったものよりも、自分で何か手を加えたい、そういうデザイン

をやっていくのも一つだし、違う方法があるんですね。ポンサーと闘ってやっていく方法と、一般人でおかしいですけど、デザインやってない方の意見をプラスさせて仕上げる方法とね。私は今ラッピングというのに、すごく魅力を感じてるんです。

**恩地** 一般の人のレベルが、これ、もう確実に上

がってるんです。だいたいどっちかというと、デザイナーより上のケースが多いですね、もう。それはデザイナーがよくしたという、だから大いに貢献したんですから誇らしく思っていいんです。

例えば京都、都市。都市であえてつけたのは、京都、京都という意味だけ言いますと別の意味があるんですね。都市をあえて後ろにつけてるのでは、これは百五十万の町ですから、都市なんですね。先程单なる地方都市というような話もあって、数字的に单なる地方都市ではなかなかないです。

とにかく街のことを考えると、個性よりは秩序のほうが先行する。ただし、その秩序をつかさどるにはものすごいやっぱりプロの見識は導入すべ

きで、あっちこっちにあたりさわりのない今の規制、のレベルではない。ですから、そこにこそ、徹底的に導入し、そのあたりディスカッションされて、こうだという結論はやっぱり出さなきゃならないと思います。

**嶋** 今なんか割とさらさらと流れしていくような気がするんですけど、確かに若い人に感動を与えるような条件がなければ、若い人が入ってこないというような問題点とかね、それと街を規制していくというような問題とかありますね。

それはなんか、そのままずっと皆ふらつといつてたけど、若いもんに感動を与えてね、もう一つその上にまた感動を与えて、慣れてまた感動を与えて、一体どうなるのか。例えば今の若い子なんですね、若い人いますけども、京都へ遊びにきて、丸い字で「京都ってとってもすてきなところです」と書くような人たちに感動をしないして与えるのかと。そうたいして感性のレベルが高いと思えないわけですよね。で、そうなると、小林さんの話やないけども、そういうものを受け入れる下地がもう若者にないのに、どうもデザイナーはそこへどんどん迎合していくって感動を与えようとしてへんかというような問題もひとつ出てくると思うんですよ。

**大野** 例えば、僕らのをつくる立場の人間ですわ。なんかつくりすぎてるというのか、なんか逆に均一につくりすぎているというか、そんなん僕はものすごく感じるんですね。例として思うのは、ええか悪いかはわからへんけども、つかしんという街がありますね。結局なんかああいう建物、横



も上も下も全部つくられたとこに、ぱこっと人間が放り込まれてね、そこで遊ぶと。例えば三つの子供がそこでそだつていくと、とても恐い事じやないかと思うんですね、これから。例えば標識にしても、田舎行ったら牧場の標識があつたりしたとき、人間としてものすうホッとするんですね。なんか一人ずつが自分のためにつくったやつが、ずうーっと寄せ集まつて、馴染んでて、とんがつてへん。いつまでも耐えられるていうとおかしいですが。

乾 確かに目新しいものを次から次から出していつたら、最後行きついでしまうんではないかというなんあるんですけど、そういう中で逆にめちゃくちゃシンプルなものが、見方によつては新しい

というとらえ方もあるていうか、逆に私とか、ま

あ割と若い年代になるんですけど、それがかえつて新しくて、目新しいもので注意をひくといふ、そういう見方もあるんですね。規制を例えば都市にしていくというのがあったんですけど、まずこのコピーのとこで、「絵葉書的な京都よさよなら」というて、單にこの文章をそのままとらえると、京都でいうのを絵葉書で見たら、どこでも、例えば舞妓さんが写つてるとか、お寺が写つてると。それが京都ですよ、というのがあるんですね。逆に、東京というものを、これが東京ですよいいう場合に、何が東京かっていうの、例えばビル一ツ写したって、別に大きなビルは大阪にあるとか、札幌にでもあるという形で、特色がないんです。

橋本 国体に向いていま市バスが走つてますよね。デザインされた方、もし関連されていたらお許し

願いたいんですけど、僕はめちゃめちゃあんなん嫌いなんですね。個人的に言うたらね。一番最初に出てきた時にね、京都の恥やんかと。で、そんなやつたら、あんなもん描かんといほしいわ、例えはグラフィックやつてる人間がもつとなんかあの時に参加できたらね。通つてて皆が、あええなあ、国体がもうじきあるねんやなあとかね。で、いろんなイベントがこれからあろうとしますよね。その時のシンボルマークね。未来くんいうのも、僕なんかダントツに嫌いなんですね。なんか見てて、なんでもっと新しいもん、なんか表現できひんのか。

## 都市・内部へ

田積 そういう意味で、今日僕冒頭に言ったグラフィックっていうものが、意外と幅が広いわりには、参加しきれてなかつたという、そういう公共施設ていうか、公共団体にアピールがされてなかつたという問題が、これはもう自業自得ですから仕方ないですね。ですから、これからまあ一つの建都千二百年に向かって、まず我々グラフィック・デザイナーっていうのは、その下地づくりがまず必要なんですよというのが最初の話なんです。それがあれば恐らくそういうこともまた国体のバスがどうだとか、それから国体のマークだつて、僕にいわせれば、一般公募してたんだから、やっぱりそれに参加して出すべきであつて、出さなかつたということもグラフィック・デザイナーの大好きな責任であつただろうという反省もするし、そ

れはやはりアピールされてないから、恐らく行政として、どこへそういうものを依頼したらいいのかというような問題点がまずなかつたということ。

うな気がするんです。



そこに大きな問題がある。

嶋 先程のお話でね、都市美観に関わる非常に広い視点にデザイナーがいる。で、まあそれでいい。ちょっとと全然角度違うかもしれないけど、さっき彼が、退屈なのは嫌だというふうなところがありましたでしょう。なんか、そうじゃなくてね。僕さっきから小林さんが言わはるのに共通すると思

うけども、見る側がね、退屈させられたら困るんやというのにデザイナーが迎合してんじゃなくて、デザイナーがもつと見る側に、退屈だって一つの感動やていうぐらいの、別の啓蒙もしていくかないと、もうどうにもならない時代がきてるんやないかと思う。

田積 しかし、それをね、ワースト的な要素ちゅうもんは、世の中にはたくさんあると思うんですけどね。バスに限らず、看板ひとつだってそうだろうし。だから、例えばワーストを擧げるうえにおいては、やっぱりベストであるという証言を我々はほんとはしなくちや絶対いけないと思うんです。提案していく状態でなかつたら、これからグラフィック・デザイナーっていうようなもんも、僕はやっぱり、市民権を得るという意味からいけば、そのへんまで本当はやらなダメでしょうね。それでなかつたら、なんばこれが赤がどうだとか、文字が多すぎるとか、いろいろなこと言ってたつて、それは納得できないし、そんなことではもうこれからは通用しないんじゃないかな、というよ

森野 それに関連して発言したいんですけど。結局、日本の文化っていうのは、やっぱり一つの側面として木の文化やと思うんですわ。現代、木の文化と石の文化が渾然となってる状態だと思うんです。だから、そういう意味において、街の景観を考える場合、やっぱり日本民族の歴史とかね、そういうふうなもんをもつとベースにおいて考えていかないと、本当に進まない面があると思うんです。

田積 だから、そういう意味で、僕は今回の第七回のこの京都デザイン会議の意義っていうのは、このテーマ自体は、九つあったけど、たいしたテーマじゃなかったなという気はしますけれど、十団体が主催したということにこの会議の意義があつたような気がします。

先程言つた、提言していくだとか、いろんなことをアピールするうえにおいての必要性っていうのは、そういう意味でも、これからこの十一団体が十二団体なり、十三団体になっていく必要性みたいな、それがやっぱり京都のもつてることについパワーになるのとちがうかなと、そのように思いました。今日はありがとうございました。

●出席者（発言順）

田積司朗（JAGDA） 奥田広幸（JAGDA）  
嶋 高宏（KDA） 小林千枝子（JAGDA）  
大野好之（JAGDA） 今村かすみ（デザイナー）  
橋本繁美（JAGDA） 乾 和代（一般）  
恩地 悅（KDA） 奥村厚人（JAGDA）  
森野純亘（JAGDA） 小林弘和（日図）

夢が形になると

## 一般参加

# 二条城に天守閣をつくろう、つ

キヤピタル	城	首都	資本
「天守物語」	天守閣に住まうは	美女か妖怪か	「天守物語」
妖怪美女のパトロン	どなたか	引き受けませんか	山岡

山岡 二条城というのは平城で、非常に華麗なる天守閣があつたわけありますけれども、これを復元する場合に、昔のままに同じ素材をもつてやれというのは文化庁の考え方であります。先程理事長が羅城門をつくる時に、その場所はどこかと、こういうことをおっしゃっているように、本来復元というのは、非常に厳格性を帶びているということなんです。ところが私は、二条城復元に関しては別の考え方を持っています。なぜかと言いますと、土木建築で先人と覇を競うということになりますと、現代のモニュメントというのは、全く同じ素材でもってやるというのは不可能なんです。この二条城の復元というものは、現在のモニメントとして考える、位置づける。そして外観だとか、そういうものにつきましては、やはり京都の景観にマッチする、または文化財としての名残りをとどめていくことになりますと、そういう色だとかデザインというものはそのままになりましょうが、素材というものが例えれば変わりに変わって、ファインセラミックスを使う。それから金の鰐に対しても、ゴールドセラミックスを使う。そういうものを使って、先人と覇を競いながら新しいものをつくりあげることが、私はモニメントではないだろうかと考えるわけなんです。

お金のことは言いませんでしたけれども、例えば今の福知山城ですね。先程、理事長がおっしゃっていましたように、あれ七億いくらでできているわけなんです。そして、市民からの浄財は一枚三千円の瓦を、皆さんに寄付致しましたら五億いくら集まつたそうです。だからほんどの、七億のうち五億は市民が集めているわけですね。京都は、この天守閣をもしそういうもので見積りますと、恐らくファインセラミックスでつくるとなりますと、一兆円か二兆円かかるんじゃないかなという気がするわけです。しかし、それが全部タダでいただくんであるならば、それはもう別に問題ないわけありますから、例えはこういうものを一人が、例えはお金を出す者はお金、それから体を出す者は体、知恵を出す者は知恵という具合に皆でつくりあげる。

桜 実はこの話を山岡さんのほうから聞きました、いっちょやらんかというお話で、まず一番最初に感じたことは、そんなものはやめとけよと。私はどっちかいうたら反対だったんです。要するにこういう旧態依然としたものをつくっていいのかどうかと。しかし一つの文化運動として活動していく中で、我々の意識を向上させる、そういう事ができるんなら、一つの目標として建ててもいいんじゃないだろうかというふうに考え方を変えてきました。で、発起人の一人となつたわけなんです。

石川 私も桜さんと同じように発起人のメンバーなんですけれども、私も山岡さんにこういうような考えをもつておるんだというお話を聞きまして、私が一昨年より天竜寺さんのほうでお世話をかけております夢窓能、あれは、古いものばかりにこだわってるんじやなしに、そこに新しい何かを入れいかなければいけないという考え方から始めま



したもんですから、そりや結構ですねと。現代の最高の材料を使って二条城をお建てになるんであれば、大変結構ですねというので、自分の趣旨に合うようなお話をしたから、はい、はいと受けたわけなんですけれども。それじゃ、実際にどういう形で建てて、いつ頃で、というような話は、今日初めてお話を聞きして、あ、これはほんとにもう具体的に進んでおるなんならと、ちょっと頑張ってメンバーを集めたりせないかんなという気になりつつあるところです。

塚本 私は長年映画の仕事をやってましたんで、それで、"大奥"とか全部やつてましたんで、その辺かなりわかつてゐるわけです。材料とかそんなんも、僕は過去に長浜城の昭和の再建、経験あるんです。やつたことあるんです。

山岡 あ、長浜城の企画をなさった?

塚本 はあ。全部やつたんですわ。イベントとか全部。ほんで、市長さんには企画書提出して、それを電通さんが実行しやはつたわけです。そんなんもありますんで、向こうのやつは鉄骨でできてるわけですわ。鉄骨で。だから、別にどうもないと思うんですけどね、鉄骨で。ただし、やり方と一つとして博物館形式にせんと、税金が高いんですね。取られるわけです。それに、多目的ホールちゅうのをつくりまして、そこで催し物をやって客を集めると。そういうやり方せんと……これ、木造でやってたら大変ですね。

山岡 ちなみにね、私もこの間、こういうこと関心もつて、熊本城行った時に、熊本城の三層の小さいので二十六億円、木造でかかったと。鉄骨で

やると、もうドゥーンと落ちるんですね。

それ京都はね、今現在のとこ、工芸博覧会やりましたり、今度は歴史都市博やりますね。イベントホールというのをつくりますけれども、第二回内国博覧会いうのが確かあれ、明治四年でしたかね。明治四年に第一回をやつた時には、京都にパリオンとしては西本願寺の書院が、第一回の博覧会場になつてゐるはずなんですね。第二回が確かあれは西本願寺と建仁寺と知恩院と、三つがパリオンになって、ちょうど全部ともこれ、今のもめてるお寺と違うのね、これ、協力しとるんですね。で、その時の二条城、これ全然関係ないです。まあその時は恐らくね、二条城ちゅうのは、宮内庁のね、なんやとかね、難しかつたんちがいですか。いろいろあるんでしょうね。

太田さん市役所の人やけど、どう思う?

太田 そうですね。私もお城とかいうんじやなくて、市民のもんを皆で有効利用するとか、現代の技術の枠でもつてしばらくのステキなお城にするというのは現実的なことなので、いいと思いますし、それから、中で働く人たちがそういうふうに仮装したりしたら、すごく面白いなんかが出て、楽しいなと思います。

北条 僕は設計とか都市計画をやつてるんですけどれども。今日参加したのは、先程の呼び込みの山岡さんのお話が非常に面白くて、京都にも面白いものがあるなと思いました。

何に興味をもつたかというと、やっぱりこれは夢とロマンについてだと思うんです。京都がやっぱり歴史あるとか言われながらも、もう一つ、い



まいち光らないようなね。皆が夢とロマンをね、なにもないとやっぱりなくしてきたんじゃないか。そういう意味から言うたら、この天守閣復元というのはね、夢とロマンですから、あんまり焦ってやる必要はない。気長にやるほうがますますその夢もロマンも大きくなるし、それに集まつてくる人の輪も広がってくるやろうし、そういうふうに手間暇かける中で、ほんとのいいもんがつくられていくんじゃないだろうか、ということでは。

### 私もやります石運び

山岡　ありがとうございます。実はあんまり細かい規約もつくれない、なにもしない、お金のことも言わない、何も言わないというのは、まさに今、北条さんがおっしゃる夢とロマンをつくりたいといふのがほんとの願望なんです。

古賀　ついこの間、ホテルの一番最上階なんかでラウンジとかございますよね。そこから見てまして、京都であまり高層ビルでございませんでしょ、そういうとこから眺めますと、あー、やっぱり京都で落ち着いたいうのか、大都会的な雰囲気がないからこそ、いいなというようなところがあるんです。ですから、あまりケバケバしいネオンじゃなくても、どちら見てもこのお城が浮かびあがっているということを、ふっと、今日の山岡さんのお話聞いてまして、あ、きれいやろなという、単純な、そういうふうなことを思うたんです。

井上　私もこんな話があるいの、今日は初めて実は知ったんですけども、友達が他から来ますね。そうすると京都で何年たっても変わらないで

言うんです。それで活気もないし、なにもないという話をよく聞くんですけども、こういうお話をあれば、町のものが集まって何か活気が生まれるんじゃないかということ、先程、ものすごくロマンと夢があるておっしゃったんで、私もこれはもう実現するのかなと現実には思いましたけれども、そういう夢をやっぱり追つてみて、活気づけたほうが今西陣もどこもわりかた不況で駄目だと言われてますね。そういうところから、こういうものから何かひとつまた他のものでも、活気が出てくるんじゃないかなて、ふと思つたんです。

平松　年に一回ぐらい、だいたい時候のええ時に家族とか、遠方の学生時代の友達が来ますと、二条城へ行くんですけども、桜も非常にきれいですね。いま天守閣のあつた跡じゃないかと思うんですが、南西の、本丸の、ね、石垣が残つてますね。向こうから下を見ると、だいたい堀とかね、向かいの学校なんか見えるんですけどね。二条城の外周をね、回ったところで実は何もないわけですね。こう見えてますと、正門はわりと大きいし横にも古い門、それに東の角とこね、ちょっと櫓がありますな。あれぐらいでね、もう一つ頼りない。これ物をつくるとかね、修理するとかいうこと、だいたい自分が好きなんかもしりませんけどね。

　　これらの物をつくるとかね、修理するとかいうこと、だいたい自分が好きなんかもしりませんけどね。まあ、死ぬ時は、人間なんぼ気張ってもお金を持っていくんわけやし、なんかね、自分がこの世からなくなる時にですな、二条城の天守閣つくるとき、わしも参加したと、いろいろ手伝ったんやというような気持ちになりたいと。私も写真のほうの仕事してますんで、記録とか、土こねとか、そ

ういうことをできたらとしてほしいと、そういう  
ように思っています。

**辻井** お話を少し聞きまして、そういうったことで

今日寄せていただいて、また私に最もぴったりの  
お話を聞いて、あ、これはいよいよ私の念願がかな  
いそうやと、是非ひとつどんなことでもさしてい  
ただいて、やってみたいと思うてます。まして私  
なんか、京都で生まれて、京都で育って、で、京  
都で死んでいくわけですからね。ひとつ爪痕をち  
ょっとだけでもつけてね、協力したいと。そして、  
非常にこれは楽しい夢だと思ったことは、この中  
に一つも汚らしさがないですね。だいたい京都  
人でいうのは、がめつうて、細かくて、汚くて、  
お金を出すことやつたら嫌だと。ところがこれや  
つたら、なんかね、自分がやっぱり出したいよう

な気持ちに、なんかね、そういう気持ちになる  
ようなムードのいいお話をと。ひとつまた、生き  
ているうちにですね、こういった楽しいお話を進  
めばええことです。こうやって見ましたら、私が  
一番年長者です。

**河原畠** 私も今のお話のように、石川さんから、  
二条城に天守閣をたてるけど、今度それにひとつ  
参加しないかと。城が好きで、ちょっと前で受け  
ど、子供を連れながら城回りしたことがあるんで  
す。京都にこんなのがあつたら、いいやろなと、  
思っておりましたんです。

**内田** 僕も市内の建築設計事務所で働いているん  
です。僕は、天守閣があつたっていうのを初めて  
今日知ったんですけどもね。できたら、僕は今の  
技術力やつたら、こんなもん簡単にできると思う

んですわ。むしろその過程でね、京都で祭りちゅ  
う的是ありますけども、市民が参加できる祭りち  
ゅうのないですね。祇園祭りにしても、葵祭  
りにしても。

**山岡** あれ、もう役の人が決まってるもんね。

**内田** 決まってますでしょ。シナリオが決まっ  
てる祭りやさかいに、だから僕は、この二条城つ  
くるということ、一つの祭りとしてね、建ってし  
もうたら別に、そのあとは、ああ出来たんやな、  
てなもんで、それまでの過程が僕ものすごく大切  
ちゃうかいなと思うんです。

**山岡** それじゃあ、その次に、まだ時間があります  
から、イベントをやりましょう、計画しよう。  
今日やりましょうね。イベント計画して、すぐや  
りましょう。

**内田** 今日からですか？

**山岡** そらそうですよ。（笑）全部に意見を聞いて  
からね。

**高橋** そらかまいませんわ。（笑）ただ、二条城で  
いうところは、まあ言うたら、美術工芸とか、云  
云とか、いろんな京都の文化がまだ遺されている  
ところですしね、そこに天守閣をたてるというこ  
とですけれども、外観はどうなんですか？



を京都の一つのシンボルにしたい。今まで京都でいう町は、いろんな情報を世界に向かって発信してたわけですね。そういう面ではインテリジェント・シティですが、どうもそれも古いと思うんです。もっと、いわゆるインテリア・シティとしての京都のシンボル、その、なんていいますか、拠点といいますか、センターにしたいなと思つてます。

梅 先程、北条さんの言われたように、私は、いわゆる夢とロマンですね。これは京都発で全国へ売り出していく、特に京都というのは、日本人からすれば、日本の心の故郷ということでありながら、そのための動きを一切やつてないというのが京都の現状だろうと思うんです。そういうふうな夢を、だから、石一つでもよろしいやないかとか、運んでくるとか、それにしても、こういうふうなところで、日本の故郷を再度皆さんで見直しましようやと。で、京都発と、京都から全国へアピールしていく、京都の人間だけでこういうようなものをつくりましょうというのじゃなく、日本中で皆これをつくろうやないかというふうな形にしていく。

### 夢情報・京都から

山岡 いろいろ皆さんの意見が積み重なって、今現在では集約する必要はないんですが、発信基地としての京都というものをもう一回見直そうやないか。見直すというところがないと、全てニュース、ラジオ、テレビでも東京のニュースがもう小さいものでも誇大化されて全国に伝播していくと。

ちょっと面白うないやないかと、京都人としてはね。京都発のニュースを全国に流したい。

(遅れて、河崎さん、山本さん、団さん、伊藤さんが参加)

山本 もうちょっと聞かせてもう。ほんまに建てはる氣イがあんのんですか。それやつたらそれなりのことやらしてもらいますけど。(笑)

山岡 いや、皆ね、ほんとに建てはる氣があるんですわ。

山本 それならね、さっき言ったはったように、木とか石垣の一つでもね、手当てをね、一人一人が、あこにああいう石があるのでとか、皆がそういう具合に思つていたらね、自然と建つんやないかと。ほんで、かなり大規模な計画をしてね、まあ、国とか市が止めに入るぐらいのね。

塚本 建物の敷地が重要文化財とか、そんなことがありますからね、国の制約はきついですよ。

山本 今おっしゃつてるようにな、國が重要文化財やと言おうとなんと言おうと、そんなん関わりなくね、計画を進めるところに、またええとこあると思うんですね。

山岡 文化財見直し論みたいなもんも、そらそこで起つることも僕はいいことやと思うんです。僕はね、ヘリクツを言うんですけど。そんだけ現在の文化財が大事なんやつたらね、二条城を建てた時には旧文化財は破壊しとるわけです。あの下を掘ると、繩文式のね、文化が出てくるんですわ。これ、どうしたらえんですか?というようなヘリクツもね、文化庁に言つてみたいわけです。

これ今日、歴史的会議ですよ、これ記録にとら

れでですよ。ほんまにこれ、二条城が建った時は、あの時の設立発起人の名はですね、ちゃんと名簿に、写真も撮られたわけですから。これは罪が重いわけで(笑)。

それで、イベントをね、これまた考えたいと思うんですね。

**内田** イベントはね、市とか府が入ってくるとね、すごい堅苦しいとか、制約があるさかいに、あくまで協賛程度にしておいてほしい。

**山岡** なるほど。正会員には入れないわけね。個人以外はもう。

**梅** あれは要するに京都市のものであって、皆のもんであるという認識をね。

**山岡** あ、もたなあかんね。それを皆さんね、もたなあかんね。

そらそろやわね。日頃から、管理費の一部を僕らがちょっと。入場料いうたら違うのね。管理費の一部を払わしていただきたいとるわけやから。  
**平松** ああいうとこ、記念の植樹するつちゅうのは?

**河崎** 記念の植樹もええけど、石は置いたらあかんのですか。記念の石は? 石垣のんを一つずつ記念に置いてくるんです。(笑) 陣取りしていく。

**北条** 長ーいことかかってやりましょうや。別に千二百年を目標にせんでも。先に長いほうが樂しみがありますよ。

**内田** どかか百貨店かどこかでね、幼稚園と保育園の園児に一遍二条城のイメージスケッチを描かして、イメージの展覧会をするんですわ。こんな二条城があんねんやなど市民レベルで考えてもう

て、そこから始めるていうような。幼稚園とか児童の描く絵っていうのは、ものすごく、大人がびっくりするようなもんがありますからね。

**山岡** 今日は、皆さん、締めくくりというようなことはないんですけども、やっぱり夢とロマンの二条城天守閣を建てませんかということ、これ皆さん手で建てましょうと、スポンサーがつくのではなくて、皆のアイディア、だから、知恵のある人は知恵を貸すと、そしてお金ある人はお金を出すと、物のある人は物を寄付すると、何もない人は口だけでもええから出してもらうと。そういうことで、なんでもいいから沈滞している京都の空氣をがらっと変えるために京都でそういうものを建てようじゃないか、そして夢とロマンをつくるうじやないか。そして情報の発信基地としての京都、そういうものを全日本、または全世界に知らしめようではないか、ということで、頑張つていきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

#### ●出席者(発言順)

山岡景一郎	(一般)	河原畠久男	(一般)
梅 正隆	(一般)	内田正弘	(一般)
石川公三	(一般)	高橋公博	(一般)
塙本隆治	(室 内)	山本則次	(日 図)
太田貴子	(一般)	河崎悦二	(日 図)
北条 誠	(建築)	伊藤之久	(日 図)
古賀みづ子	(N D K)	大木ミヤ子	(K D A)
井上利子	(N D K)	馬場美千子	(一般)
平松堅一	(K D A)	小原源一郎	(一般)
辻井睦治	(一般)		

# 第七回 京都デザイン会議・参加者名簿

(五十音順・敬称略)

## 社団法人日本図案家協会（日図）

赤石 逸三	伊藤 之久	大石 浩司	大北 捷一	片桐 嘉正	河崎 悅二	金原 保則
熊谷 實	小林 弘和	斎藤 勝哉	佐々浪昌夫	谷口 弘明	田村 義一	団 武夫
深津 昭夫	藤木 武久	山口 晴司	山本 則次	米田 健一		
京都服飾デザイナー協会（KDK）						
上田 年子	梅沢 弘子	小山 道子	塩山 秀子	辻 美菜子		
社団法人日本デザイン文化協会 京都支部（NDK）						
浅井 幸	井上 利子	井上 美恵子	木下 昌美	古賀みつ子	中橋 貞子	山本 次枝
水口 あき恵	村上 欣美枝			高瀬 肥子	仲 絹代	
京都伝統産業青年会（伝青）						
谷口 主嘉	谷口 秀一					
京都インテリア産業協会（KIS）						
大村 俊雄	角田 康	柏木 桂	岸本 康志	野々村道信	本郷大田子	
社団法人京都デザイン協会（KDA）						
今西 慧	大木ミヤ子	尾崎 要				
柴田 裕	鳴 高宏	志磨村ひろみ				
山本唯与志						
山本 竜一						



京都室内装備設計士協会（室内）

尼川 恵一 井口 明夫 木下 長生 泽野 周二 塚本 隆治 藤川 一光 藤本 進  
米田 匠宏

協同組合京都クラフトセンター（KCC）

浅田 篤志 池川 槟亮 木曾 宗統 竹村 昭彦 田中 良一 簇持 宏 藤原 昭

京都建築設計監理協会（建築）

浅岡 幹夫 内丸 恵一 斎藤 隆三 坂本 克也 長戸 幸雄 北条 誠 松田 緑

京都建築設計監理協会（建築）

三輪 泰司 山本 達哉 大野 好之 奥田 広幸 奥村 厚人 小林千枝子 田積 司朗 橋本 繁美 久谷 政樹

社団法人日本グラフィックデザイナー協会京都地区（JAGDA）

松本 好雄 森野 純亘 遠藤 泰一 太田 玉重 小川 幸雄 黒竹 節人 木幡光三郎 新宮 克美 中谷 浩志

社団法人京都国芸センター（ICC）

林 晓子 正木 友梨 松本 俳沙 乾 和代 岩坂 好和 内田 正弘 江畠 武美

一般

池田 敏彦 石川 公三 稲田 勝彦 甲斐 竹子 加々美佳呼 河原畑久男 久保内信子

大倉 達也 太田 貴子 岡本 透 逆井 宏 神保徹一郎 柴田富佐子 鈴木 宗敬

小林 郁央 小原源一郎 小山 寛治 土井 妙子 辻井 瞳治 中沢美代子

須田 照子 大誠寺陽子 高瀬 公博 梅 正隆 山岡景一郎 馬場美千子 東田 崇資

中島 慶子 長岡 要 西川 昭子 西田 永子 能 英樹 吉村 文男 吉村 元男

御招待

木下 稔（財平安建都千二百年記念協会理事長） 大橋 哲夫（財平安建都千二百年記念協会事務局次長）

西口 光博（京都市経済局商工部伝統産業課長） 上羽 章夫（京都市経済局伝統産業課染織係長）

岩崎 猛（京都市経済局伝統産業課） 裏井 紳介（京都織物卸商業組合青年部会）

篠原 秋良（財国際デザイン交流協会） 今村かすみ（神戸デザインアーズ協会）

松田 豊（奈良デザイン協会） 公文 茂人（京都新聞社文化事業部）

# 京都銀行

## 京都信用金庫

## 京都中央信用金庫

## 伏見信用金庫

## 西陣信用金庫

## 京都相互銀行

第七回 京都デザイン会議・会議録  
発行・昭和六十二年五月三十一日

編集・京都デザイン会議実行委員会

エディション アルシーヴ

撮影・スタジオ 写洛

事務局・京都デザイン関連団体協議会へ京デ協

〒六〇五 京都市東山区祇園町北側二七五

ABL三階・(社)京都デザイン協会内

電話 (075) 541-10239

印刷製本・室町印刷

